研究紀要

第 32 号

（目　次）

〈論　文〉

Sakhalin Karafuto: Close but Distant, Distant but Close

…… Jun Harada …（1）

ジョルジョ・アルマーニがデザインしたもの

－ファッション史に対する歴史学的考察の一試論－　…… 青　木　輝　憲 …(15)

ニースのスラム「la digue des Francaçis」におけるチュニジア系移民

－スラムの問題と機能－　…… 青　木　輝　憲 …(33)

〈教育実践報告〉

ハムレットに挑む　…… 柳　本　　博 …　1

2017

獨協中学校・高等学校

教育実践報告

ハムレットに挑む

国語科　柳本　博

第一章　ついに最高傑作に

日韓友好ＴＯＫＹＯドラマフェスタにおけるシェイクスピア試演会シリーズも第3弾を迎えた。当初、半ば苦しまぎれに始めたことを思えば、感慨はある。しかも早くから、今年は『日本ハムレット』であると宣言していた。２０１５年の「ベニスの商人」、前年の「ロミジュリ」とくればもはやハムレットしかない、などということはまったくなかった。二刀流・大谷選手がメジャーに行くかどうか。時事ネタのこじつけである。自分では大切なコメディ要素のひとつだと思っているのだが、タイトルからして笑いをとりにいくことである。スキあらば、前後左右上下、東西南北天地、笑いをとりにいくのを常套手段としている。それでも、前二作よりも難しくハードな、だからこそ最高傑作と誉れ高き作品「ハムレット」。四大悲劇の中でも特に人気が高く、上演回数も最も多いといわれる。主要登場人物は、殺し殺され、あるいは自ら命を絶つ。すべてはタイトルロールひとりの妄想から、である。ところが、妄想ではないかもしれない、と思わせる謎がこの作品の魅力のひとつでもあろう。いつもの試演会方式で生徒に問いかけてみると、さて、どんな化学反応を引き起こすことになるのだろうか。

第二章　日韓友好ＴＯＫＹＯドラマフェスタ上演台本

『日本ハムレット　――メジャーに行くべきか行かざるべきか、それが！――』

作・小谷翔平（例によって、生徒との合作ペンネーム）。最初の年の獨協太郎（ひとり・きょうたろう）、前年の複写太郎（コピたろう）に続いて、コタニでもオタニでもなく、「ちっちゃたに」と読ませ、最後も「びっくりマーク」と言ってもらい軽く笑いをとった。まずは場内アナウンスによる先制ジャブである。

登場人物

土屋イルス龍斗（菊池）　塩澤優希（監督）　小林蓮（翔平）
石崎哲士　大野暁春　澁谷新生　高橋開成　波田野大祐

坂本和俊　近藤　陸　中山雄暉　黒佐佳生　松本　錬
是枝　大　麻生直樹　大橋建斗　川下大成　大西和弥
吉村　嶺
ハムレット　父の亡霊　クローディアス　ガートルード
オフィーリア　ホレイショー　ポローニアス　レアティーズ
フォーティーンブラス

PROLOGUE

駆けてくる翔平（レン）。呼び止める監督（塩澤）。

監督　おい待て、翔平。
翔平　何やってんですか、監督。
監督　わたしが栗山だよ。
翔平　だからなんで栗のかぶりものなんかしてるんですか。
監督　ふっふっふ、おまえをメジャーに行かせないためだよ。
翔平　行くべきか行かざるべきか、それが問題だ。
監督　行かせない。
翔平　なんで！
監督　もらってほしい。
翔平　なんですか。花束ですか。ああ、花束ならば、連日連夜、ああ、それこそ小ジャレた花屋のひとつやふたつできるほど貰っている僕です。ピッチャーとバッターの二刀流じゃなくて、野球選手とお花屋さんの二刀流だなんてそんな。
監督　（前髪をひらり。当然サンプラーの出番です）んんん～。（否定）違うのよ。もらってほしいのは、あ・た・し。
翔平　（それまでのハムレット口調からまったくレンになる）……あー、あー……。
監督　なんのために56歳まで独身でいたと思ってるのよ。
翔平　えッ？　あなたは父を殺したクローディアスかと思ったら。
監督　苦労じゃないわ。私こそが、そうよ、オフィーリアよ。あなたの二刀流。こっちにも使うのよン。音楽！

「セーラームーン」のテーマにのって役者紹介。
演出家の土屋がいつもの虫も殺さぬ笑顔で登場。灰皿を投げるふりなんかして。
当然、演出家らしく土屋はカッターシャツの前をはだけている。胸毛がせり出す。

土屋　（胸毛をぽりぽりかきむしり、指にまつわりつく毛を吹きながら）はーっはっはっ。今年も快調。いい出だしじゃないの。
塩澤　そうですかね。
土屋　いいよ、いいよ。きみもね。
レン　はい、ありがとうございます。
土屋　ズバーッとね、思い切ってやればいいから、それで。

塩澤　ハイ。
土屋　あれ、きみたちどうしたのかな。

大相撲協会のような癒着の激しい最上級生に比べ、下級生は必死なのだ。

是枝　先輩、僕たち納得いきません。
松本　納得してません。
土屋　何が。あれ、どーしたの、コンドーちゃん、暗い顔しちゃって。
近藤　おかしいと思うんです。
塩澤　何が。
レン　どこが。
松本　これってハムレットですよね。
土屋　そうだよ。
近藤　ど、どこが！
塩澤　だからアレだよ、年末恒例のシェイクスピアシリーズ第3弾。今年はいよいよハムレットに挑戦！
レン　お言葉ですが、僕はちゃんとした演劇をやろうと思って入部したんです。
松本　これって。ねぇ。
是枝　ああ。
近藤　ふぬーっ、ふんぬぬぬぬぬ憤怒ー。
土屋　何をそんな。興奮することなんかないって。
塩澤　そうだよ。あれ、高1のみんなもどーしたんだい？

ネオたちも中国共産党の独裁に反対する香港市民のようになっていた。

ネオ　聞いてください。
高橋　去年の話です。
土屋　何をだよ。
坂本　やりましたよね。ロミオとジュリエット。
塩澤　楽しかったね、シン・ロミオ。
坂本　シンゴジラとネッチョネチョにからめて、現代の恋愛ものにしました。それはいいです。百歩譲って意図はわかります。
高橋　でも、なんすか、あれ。
土屋　え、まさか。
ネオ　そうですよ、あれですよ。
土屋　まさか。
一同　ピースマン。

真ん中に土屋。みんな取り囲む。
去年のまさにこの日、あの栄光の一瞬が土屋の脳裏を去来する。
土屋はしばし、去年の自分にアイデンティファイする。

土屋　正義の味方だピースマン。正義の味方だトオゥート
オゥー。

一同、足をドン。

土屋　ハッ。（我に返る）

たちまち手のひらをこすり始める土屋。

土屋　あれは、あれは……。
大野　なんですか、ピースマンって。
石崎　そんなもの本物には1ミリも出て来やしない。
波田野　シェイクスピアも怒っているでしょう。
土屋　あれは、俺がちょっと調子に乗っちゃって、一回ぐらい
スーパーヒーローを……。
ネオ　なんでロミオが料理対決したんですか。
麻生　なんで僕がジュリエットだったんですか。
黒佐　おかしいよ。なぁ。
一同　うん。
松本　どうして僕が幼稚園児だったんですか。
川下　おかしくないよ。なぁ。
一同　うん。
石崎　風の噂ってなんですか。
レン　あ、あ。

高橋　僕たちは怒っています。演劇を馬鹿にするのもいいかげん
にしてください。
波田野　もう審査員に罵倒されたり、アンケートにぼろくそに書か
れたりするのはごめんです。
塩澤　ごめんちゃい。
石崎　あなたじゃない。
塩澤　え？
石崎　あなたは悪くない。いちばんの権力者である土屋さん、あ
んただよッ。
土屋　はっはっは。
中二　なに笑ってるんですか。
土屋　てめ、ザキ石、前に出ろ。
石崎　は？　なんスか。
土屋　てめェ、ちょっとアンケートに。
石崎　あ〜ぁ、カッコよかったって書かれたことですか。嫉妬で
すか。見苦しいですよ、土屋さん。
土屋　違うだろ。おまえは「カッコよかったかもしれない」って
書かれてたんだろ。
石崎　まぁ、生まれ持ったパーツが違うんですかね。
土屋　ふふふ、そうか。（急に納得）
レン　なんだったんだぁ。
塩澤　土屋ぁ—。
坂本　ちゃんとしてください。
ネオ　ちゃんとしたものをやってください。

石崎　それが、俺たち、
高1　高1の、
近藤　わ、わしら、
中三　中三の、
黒佐　わ、わたくしたち、
中二　中二の、
吉村　僕たち
中一　中一の、
大橋　そしてごんぎつねの、
一同　何ッ。
麻生　おまえだけだろッ。
大橋　すいません。（ほいほいほいと下手に）でも、いきますよ、僕たち全員の、せーの！
一同　願いです。
是枝　願いなんですよ～。（スリスリ）
近藤　さあ、どうなんですか。ちゃんとやらないと、首が飛びますよ。
石崎　やぁっ。（斬る）
近藤　わー。（首が落ちる）
中山　おまえが落としてどうする。
近藤　ふぬ。（戻す）
レン　ぬぬぬ、ここまで言われてどうする、土屋。
塩澤　おまえだけが頼りだ。土屋。
土屋　よし！
レン・塩澤　土屋！
土屋　よしわかった。私、土屋イルス。とはいえ、いつまでも居留守を使っている場合じゃない。今年こそ、今年こそまともにやろう。年末恒例、シェイクスピアシリーズ。
レン・塩澤　ありがとう、土屋。
土屋　（胸毛をかきむしりながら）どれがいいか選んでもらおう。

このスキに中学生は出ていき、高校生のみ残る。

塩澤　そう、これは我々が夏合宿でやってる試演会方式。古今東西の名作戯曲を一つ選び、ひとチーム十分で同じテーマの同じシーンをいかに演出、
小林　料理するか。
土屋　その勝負。
塩澤　合宿の時は競うのです。そしていちばんいいチームを選ぶのです。選ばれたチームが行くのはそれこそまさに、
全員　天国！（全員、しばらく天使のように宙を舞いながら高1去る）
塩澤　さぁ選ぶのは、
全員　（客席へ指を突きつける）あなたです。
小林　まずはネオ班。
塩澤　よーい、第一回選択希望選手。清宮幸太郎、早稲田実業高校、内野手！
清宮（川下）　ほほほのほーい。（出てくる）

スイング。カキーンっ。

レン　今年も、どうなるのかしらね、奥さん。

川下　本当ですわ。

一同、笑いながら去る。

●SCENE　1　黒組　澁谷班

男、出てくる。

男　紳士淑女のみなさんごきげんよう。新生（ネオ）班のハムレットの始ま……

別の男　滑舌が悪いんだよッ。

ネオ　ネオさんがいないのに勝手に始めんなよッ。

三人　そうだそうだ。

ネオ　よし行くぞ、せーの。

一同　紳士淑女のみなさんごきげんよう。新生班のハムレットの始まり始まり！

男たち　デンマーク王ハムレットの突然の死の知らせは、人々を驚かせました。しかしハムレット王の死後すぐ王妃のガートルードがハムレット王の弟クローディアスと結婚し、クローディアスが王位についたのでした。そんなある日、亡き王の息子ハムレット王子のもとに亡き父の亡霊が現れたのでした。（説明する横で動き）

ハムレット王と対峙する父亡霊。

ハム　父上、なぜあなたは墓を出て、こんな月夜に再び地上に姿をお見せになったのです？　あなたのために私は何ができるでしょうか？

父　ハムレット、お前にだけは伝えておく。我が弟のことだ。クローディアス、あいつが。

兵士　王子！　ハムレット王子ッ？　どちらにいらっしゃるのですかッ？（探しながら去る）

父、去る。

ハム　父上！　いったいクローディアスについて何を……まさか奴が父を殺したのか……？　生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ。どちらが男らしい生き方か、じっと身を伏せ非道な運命の矢弾を堪え忍ぶのと剣を取り、復讐を遂げるか、いったいどちらがいいのだろうか。

ハムレット、去る。

ガートルードとクローディアス、入ってくる。

クローデ　最近我が息子の様子がどうもおかしい。何やらずっとふさ

ぎ込んでいるようだ。

ガート　実の父がむごい死を遂げれば鬱屈とした気持ちになりますわ。

クローデ　たしかにそうだな。ましてやあの多感な時期に父を亡くせば相当ショックだろうな。

ガート　そんなことより、あのことを伝えなくては……

クローディアス、刀を突きつける。

クローデ　口を慎め、我が妃よ。

ガート　申し訳ございません、国王様。

2人去る。

ハムレット、オフィーリア、出てくる。

オフ　今日のデート楽しかったわね！

ハム　そうだね、築地市場から豊洲市場まで移転するなんてね。

（日替わり）

オフ　次のデート、どこに行く？

ハム　実は大事な話があるんだ、オフィーリア。

オフ　何？　ついに、私たち結婚できるの？

ハム　……僕たち別れないか？

オフ　嫌よ！　たとえあなたが拳で抵抗しようとしても絶対にわかれないんだから！どうしてそんなこと言うの？

ハム　僕にはやらなくちゃいけないことがある。オフィーリア、わかってくれ！　君を巻き込みたくないんだ。

ハムレットを阻止しようと抵抗するオフィーリア。しかしハムレットは無情にも走り去る。

オフ　こんな可愛い私を捨てるなんて許さないんだからッ！

中割り閉じる。

ハムレット出てくる。

ハム　クローディアス王、話がある！

中割り開くと座っている王と王妃。

王　なんだ、そんな口のきき方をして。我が息子よ。

ハム　俺の父親は高貴なハムレット王だ。穢らわしいお前の息子などではない。

王　何を戯言を。いったい何の用だッ？

ハム　単刀直入に聞こう。父上を殺したのは貴様だな。クローディアス。

王　何を言っているハムレット？　私は……

ハム　黙れ！

殺陣。

ガート　ハムレット！　やめなさい、新しい父上に。あなたは勘違いしているわ！

王　そうだ。私は兄の死後、君と君の母君を任されていたんだ！

ハム　そんなことはないッ。

ガート　いいかげん信じろ。

ハム　えっ……ってことは俺の勘違いッ？

一同　そーだよッ！

ハム　スイマセンでした！

入ってくるオフィーリア。

オフ　ハムレットォ！

ハム　オフィーリア！

オフ　逃がさないわよ……あなたを殺して私も……私は生きるッ！

ハム　待ってくれオフィーリア、どうやら僕たち別れなくていいみたいなんだ！

オフ　本当ッ？　大好き。

キスするふりを隠す両親。

王　とにもかくにも一件落着だな。今夜は宴だ。朝まで踊るぞ！

音楽。歌って踊る。「ジャパリパーク」。サイリュウムを駆使して盛り上げる。

●SCENE　2　白組　波田野班

波田野　次は、波田野班のハムレット。お乗り遅れなきよう。

波田野去る。ハムレットが出てくる。

ハ　このあたりで亡き父の亡霊が彷徨っていると聞いたのだが…。

王入ってくる。ハムはそのことに気付く。

王　おお、ハムレット！

ハ　父上、何故まだこの世にいらっしゃるのです？　未練がおありなのでしょうか。

王　あぁ、そのことなんだけど、俺今こうして死んでるじゃん。実は俺殺されたんよ。あのー、あいつ、弟のクローディアスに。そんでさぁ、死ぬときめっちゃ苦しかったんだよねぇ。アハハ。

ハ　あ、はい。
王　そこでお前に頼みがあるんだけどさぁ、今からちょいと死神になってきてくれね？
ハ　何故！？
王　死神にはな、成仏できない霊を成仏させる力があるんだ。そこで…
ハ　ナルホド私が死神となり父上を成仏させると。
王　そうだ、さすがはハムレット理解が速くて助かる。
ハ　父上のためならこのハムレット。命をも捧げましょう。
王　じゃあ目をつむって回れ右ッ。
ハ　はい。
王　そのまま5歩進むと…
ハ　すると…？

ハムレットは下手に去る。

王　奈落に落ちて死にまーす。
ハ　うわあああああああああ！

王去る。公務員出てくる。

公務員　俺は公務員。年収５００万でマンションの４階０４２号室１ＬＤＫをローンを組んで購入！残りは１０年。妻と一人の娘を養うために俺は日々働く。今日も死者を導くぜ！

ハ　すみません、こちらで戸籍謄本を作りたいのですが…
公　申し訳ございません。あちらで整理券を発行しておりますので番号を呼ばれるまであちらでお待ちください。
ハ　はい、すいません。
王　俺は履歴書買ってくるからお前は呼ばれたら手続きしといて。

王去る。

公　８６番のハムレットさん。
ハ　はい。あの、つい一時間前に死んだんですけど戸籍を作りたくて。
公　でしたらこちらの紙にお願いします。
ハ　はい。

ハムレット、提出。

ハム　こちらでお願いします
公　ありがとうございます。

王帰ってくる。

王　はい履歴書。書いといて。
ハ　わかりました。

ハムレット、黙々と描く。

ハ　はい、できました。

王　よし、じゃあ提出してこよう。行くぞ、事務所に。

ハム　はい。

皆去る。面接官入ってくる。

面　ハムレットさん、入ってどうぞ。

ハ　失礼します。

面　座ってください。

ハ　はい。

面　では、志望動機を教えてください。

ハ　はい。死んだ父が成仏できないとのことなので未練を持つ魂を成仏させる力を持つ死神になろうと思いました。

面　父親を成仏させる為ね…。特技は剣術とあるが自信はあるのか？

ハ　はい。あります。

面　では君の剣の腕を見させてもらおう。来い、レアティーズ！

レアティーズ入ってくる。

レア　イエェェェェイ！ジャァスティス！

ハ　古い！

レア　知らん！

面　彼の腕を知りたい。手加減しろ。

レア　合点承知、御意了解！

面　それでは始め！

構える2人。手合せ。解説する面接官。

レアとハムの殺陣。

面　レアティーズの攻撃。

レア　うおーっ！

ハムレット、よける。

ハ　こいつ…弱い！

殺陣再開。

面　レアティーズの攻撃。

レア　うおーっ。

面　ハムレットはかわす。ハムレットの攻撃。（ズバッ！）ハムレットの攻撃。（ズブシュ！）ハムレット攻撃。（ずぶしゅ）ハムレットの会心の一撃。（ズバブシュッ）レアティーズはダメージを受けた。

レア　うおーっ！　こうなったら！

と言いながら、頭で剣を受ける。

レア　見たか、これが我が奥義。真剣白刃取り（になっていない。パチンのあと崩れる）

面　そこまで！

ハ　たいしたことないな。

レア　（握手を求めて）いい勝負だった。おまえはまだまだ上をめざせ。来い、高みへ。

レア、強がりながら退場。

面　試験は以上です。結果は後でお知らせします。

ハ　失礼しました。

面接官とハムレット、舞台上の椅子などを持って退場。王入ってくる。

王　まだかなぁ、遅いなぁ。

ハムレット入ってくる。

王　どうだった？

ハ　まだ。後で連絡するって言ってた。

メールくる。

ハ　堕魔死神会社から連絡だ。

王　どうだった？

ハ　おっし、合格だ！

王　やったぜ。じゃあクローディアスを殺しに行くか。

ハ　はい

ハムレット、王去る。

クローディアス入ってくる。マントを翻し、ひとりミュージカル。

クロ　♪王を殺して～手にした～やっとつかんだぞー王座を～
俺の名前は、クローディアース
クロクロクロクロ、クローディアース！
わたしだー　ハーッハッハッ。

王とハムレット入ってくる。

王　美しいバレエジャンプだ。

ハム　何いってんのこいつ？

黒　ああ、最高だった。耳から毒を入れたとき、苦しんでのたうちまわる姿は快感だったな。ハー。

王　怖っ！怖いんだけど、俺の弟ってこんなにやばかったの？

ハム　クローディアス！！貴様は王にして実の兄であった父上を……ここで殺してやる！

黒　ハムレット、兄さん！？二人とも死んだはずでは？

ハム　いいんだよそんなことは。とりあえず、お前を殺してハッピーエンドだ！

黒　私をあまりなめるなよ。これでも、私の戦闘力は５３万です。安心してください、本気は出しませんよ。

王　お前の設定はフ〇ーザ様か！ならば私も、グイングイングイン、はあああああああああ！！

黒　す、すごい！５０万、５１、５２、５３、５４……まだ上がるのか！？

王とクローディアスの殺陣。

王　行くぞ、アーンパンチー！　キィーック！

黒　ハヒフヘホー！

クローディアス去る。

王　これで私も、気持ちよく転生できる。ありがとう！

王去る。

ハム　俺は何のために死んだんだ！？未練だあああああああ！

ハムレット去る。

●ＳＣＥＮＥ　３　紅組　土屋班

上手から実況、下手からクロとハム出てくる。

実況　さあ日本シリーズもいよいよ大詰め！　いろいろあって、いきなり９回裏２死満塁という状況からの再開となります！　バッターは今シーズン２００ホームランを放った怪物黒・ディアス！対するは今シーズン０勝４５敗、防御率９９・９！なぜここで投げているのかよく分からない男、破無・レット！さあ運命の第１球、投げました！

するとボールが黒に当たる。

実況　おーっと、デッドボールです！デッドボール！　怒ってます。胸倉つかんでます。あっと、乱闘が始まっています。これはいけません！

と、破無、銃を取り出す。

実況　な、なんと、銃だ！銃をもっているぞ！なんで持ってるん

だこの人！

と、謎の男が逆サイドから登場し、破無を殺害。破無絶命。

実況　……誰だーーーー！

黒　やったぜ。

実況　以上、日本シリーズ中継をお伝えしました。なお、土屋班、ここから本編となります。全員、暴走！

全員、去る。

社員と王、出てくる。

社員　あ～やっと仕事終わった。やっぱ一日18時間労働はきついぜ。

王　いやそれブラックの域超えてんだろ…。

社員　それな！ってあんた誰だ！ってかどっから入ってきたんだ？

王　そこの窓から。

社員　そこの窓からって…ここビルの38階だぞ！？

王　だって俺幽霊だもん。

社員　いや、そういうのいいから。確かに足はないように見えるし触っても実態ないしちょっと浮いてるように見えるけど幽霊なわけないだろう。

王　何故足はないように見えて触っても実態なくてちょっと浮いてる気がするのに幽霊と思わない？　そもそもここは？　そしてお前は？

社員　初代社長小谷津建蔵によって創立された、子供たちにゲームによって笑顔を届け、ゲームによって現実を突きつける株式会社「小谷津カンパニー」の社員兼取締役社長その名も！

王　待て！　なんだ社員兼取締役社長って？

社員　それは社員が俺一人だからだ！

少しの間。

王　……頑張れ。

社員　なんだこの空気！？

王　ところでこのゲームやってもかまいませんね？

社員　おお、それは今度発売する自信作だ！

王　ほう、そんなにすごいのか。どれどれスタートっと。

ハム男バットを構え、その瞬間レア彦が次々とボールをぶつける。

王　ちょ、ちょっと待って、これって格闘ゲームか何か？

社員　いたって普通の野球ゲームだが？

王　どこが？ボールぶつけられて終わったよ？　もういい、社員、命令だ！　このゲーム一から作り直しだ！

社員　ええ～、でもこのゲーム、全世界発売決定しちゃってるし

なあ～。

王　お前全世界の野球ファンなめすぎだろ！　もういい、こうなったら奥の手だ。

社員　どうすんの？

王　入る。ゲームの中に。

社員　は？

眩い閃光。変な効果音。王と社員上手側に去る。下手側にクロ登場。

クロ　俺の名はクローディアス！　ハムレット内ではラスボス的立ち位置なのにこのゲームではただの雑魚！こんなクソゲー、俺が昨日冷蔵庫の余りもので作ったバグでも仕掛けて、このゲームぶっこわしてやろうか！

また閃光。そしてへんな効果音。上手側から王と社員登場。

王　さあ着いたぞ。ってなんだこれ。なんで野球ゲームなのにこんな中世のヨーロッパみたいな世界観なんだ？

社員　やってて気付かなかったか？実はこのゲーム、あの名作戯曲「ハムレット」とコラボしているんだ！

王　なに言ってるかよくわからない……。

クロ　な、なんだ今の光は！？ん、あいつらは誰だ？

クロ客席に振り向くと、そのまま上手側へ。

レア彦出てくる。

レア彦　あっ、あの後ろ姿は憎きハムレット！我が妹の敵！死ねえ！

社員を刺すレア彦。皆その間スローモーション。「悲しみの向こうへ」合唱。

王　社員さんがログアウトしました。

社員　ウソだ！ぐは！

社員死亡。ハム男出てくる。

社以外　死んだぁぁぁ！

ハム男　う～ん今日の入浴剤はバブにするか、バスロマンにするか・・

社以外　そして本物でてきた～！

レア彦　やったーってハムレットじゃない！この人だれですか？あなたたちも！

王　こいつこのゲームの製作者。そして俺は幽霊。

レア彦　なるほど。

ハム男　いや突っ込むところいろいろあるでしょ。大体あなたは？

クロ　俺この製作者の上司。

王　なわけあるかってお前クローディアス！なぜここに！

クロ　うわ！お前俺が殺した王！
ハム男　何ですか？これ？まるでゲームじゃないですか。
王　ゲームでしょ。
レア彦　この状況どうすれば……
クロ　こいつの持っている「小谷津カンパニー最新版ゲーム『超次元ベースボールハワフロ２０１７～２０１７年ってあと一週間ないけどべつにいいよね～』計画書をみればどうだ？このゲームについて少し分かるんじゃ？
ハム男　それです！
レア彦　何々……えっ？
クロ　どうした……ってお前全部死ぬルートじゃないか！
王　しかもほとんど完封まけじゃないか！

王とクローディアス、ハム男の肩を持つ。

クロ　可哀そうに。
王　しかも１４０通りある。
主人公　僕全部負けるんですか？
クロ　安心しろ。死に方は星の数ほどある。特にこれ「恋人に殺される」って書こうとしてるのに全部「変人に殺される」になってるぞ。
王　漢字似てるから仕方ない。
レア彦　とにかく社員さんどうにかしないと。
主人公　社員さん！しっかりしてください。
社員　何？
王　社員さんがログインしました。
社以外　復活したぁ！
社員　あっ！課長もいる。
クロ　よお。
王　お前ホントに上司なのかよ！
主人公　社員さん大丈夫ですか？
社員　コンティニューしたから大丈夫。
レア彦　ゲームでよかった。
王　ということで、
クロ　そうですねえ。
王・ク　うおおおおお！

急にボタンを乱打し始める王とクローディアス。

レア彦　どうしてゲームの中でゲームしてるんですか？
社員　このクローディアスっていう人は、このゲームの設定上王を恨んでいることになってるんです。
ハム男　なるほどーって止めてくださいよ！
王　ぐは

王死亡。と思ったら、

王　あー……あれ？

クロ　そういえばお前幽霊だったな。
社員　そうだ！ここは野球で決着を着けたら！
ハム男　なんでそうなる……
社員　だってそもそもこれ野球ゲームだし。

レア彦社員に耳打ち。

レア彦　なんでそんなこと？
社員　決着を着ければあの幽霊成仏してくれるかもしれないだろ。
レア彦　僕たちの決着も着く！
クロ　もうついてる感じしたけどね。
レア彦　確かに。ならサービスです。僕の投げたボールを一球でも打つことができたら良いということにしましょう。
クロ　じゃあ俺こっち側。

クローディアス、レア彦の肩を持つ。

王　じゃあ俺は。
ハム男　えぇ！
王　どうしよっかなあ。
ハム男　なんで！
社員　弱いから。
レア彦　ということだ。試合は明日。問題ないな。
ハム男　ああ、決戦の準備だ。。

ハム男、王上手側に去る。レア彦のクローディアス下手側に去る。

社員　……いや待て！おかしいぞ。この計画書には何もそんなこと書いていないぞ。まさかバグの発生か！今俺たちはゲームの一部！もしバグが発生したら！俺たちは！まあ、そんなわけねえか。

社員去る。

曲かかると同時に明るくなる。上手側からクローディアス、レア彦。下手側から王とハム男。

レア彦　さあ、始めよう！
社員　今去った意味あったか？
クロ　お守りだ。私の愛のキッスを受け取るがいい！
レア彦　いらねえよ！
王　頑張れよ！
ハム男　わかってます！
レア彦　いくぞ！
ハム男　ええ！
社員　さあ、始まりました！このゲーム因縁の対決！さらに、王座をめぐる兄弟げんかも乱入し、混戦が予想されます！

サイレンみたいのを口で鳴らす。

社員　1球勝負の特別ルールです！それでは！
王・ク　プレイボール！
レア彦　行くぞ！

レア彦ボールを投げる。そこにボールを打った音。

王　打った……
レア　負けた。
ハム男　やった、運命に勝ったー！
王　エクセレント。いい勝負だった。
クロ　よし、こいつをみんなで胴上げだ！
社員　待て！

全員、社員の方を向く。

クロ　どうした？
王　不服か？
社員　計画書を思い出すんだ！
クロ　すべてのルートにおいて勝つのはこいつだ！
ハム男　確かに。大体このルート自体あり得ない。
社員　これは……バグです！
レア彦　誰がそんなこと！

全員の視線がクローディアスに。レア彦剣を向ける。

クロ　誤解だ！このゲーム作ったこの社員が悪い！
社員　なんでぇ？この世界に引きずり込んだこの王が悪い！
王　違う違う！なんとなくこいつのせいだ！
ハム男　おかしいでしょ！
レア彦　わかりました。皆殺しですね。
クロ　いや何でそうなるんだよ！
主人公　だとしても男4人です！勝てるはずですよ！
社員　無理だ！相手は初期設定で剣術の道場を継いでいることになっている！
クロ　お前いろいろ変な設定作りすぎだろ！
社員　かっけえだろ。
ク・主　かっけえわけねえよ！
王　それいいな。
ク・主　お前もか！
王　まて！焦るな！これはゲームだからコンティニューできるだろう！
クロ　いや……バグの発生によってそれもできない！
レア彦　時間切れです。
レ以外　ええええええ！
一同　♪悲しみの向こうから……

一刀のもと切られ、レア彦以外全員倒れる。そこにゲームオーバー

の効果音。

レア彦　やれやれ。やっと茶番が終わったか。さて、これから何をしようかな……。

と、銃声。

レア彦　な…に…。

レア彦、倒れる。ハム男、立ち上がる。

ハム男　残念だったな。俺には主人公補正がかかってんだよ。よし、今日はバスロマンにしよーっと。

また、銃声。

ハム男　ウソだろ…。

ハム男、倒れる。王、立ち上がる。

王　ういーっ。(歓喜)言っただろ。俺は幽霊だと。斬撃など効かぬ。さて、外の世界に戻るとするか。

みたび、銃声。

王　またかよ…。

王、倒れる。クローディアス、立ち上がる。

クロ　ふん、このままたやられ役で終わってたまるか。てなわけで、今日からこのゲームの主役は、この俺様……

やっぱり、銃声。

クロ　このパターンいつまで続くんだよ…。

クローディアス倒れる。社員、立ち上がる。

社員　ふー、こんな時のために予備の回復アイテム持っといてよかったぜ。さて、元の時代に戻るとするか。…あれ?俺、なにしにここきたんだっけ?

すると、倒れている4人、一斉に立ち上がり、クロに銃を向ける。

社員　え!?

ハム　名作戯曲で遊びすぎだ、

全員　馬鹿野郎!

銃声。と同時に、全体赤くなる。

●SCENE　4　紫組　塩澤班（チーム・アベンジャーズ）

塩澤　次は塩澤班！

ところが前の班の一部（大橋と土屋）が残っていて構えている。

錬　上手に去れ！

大橋　わー！（走り去る）

塩澤　なんでいるの。

土屋　すいませんでしたー。（逃げ去る）

音楽。「ルージュの伝言」

いつものOPと共に芝居のあらすじを語る役者たち。

塩澤　坂本ハムレット、前回までのあらすじ！

坂本　この国の国王である、俺の父上が殺されたんだ！

高橋　はっはっはっ、ウェルカム！

坂本　そして次の国王になったのは、殺された父上の弟。俺の叔父のクローディアスだった！

塩澤　そこで、坂本ハムレットは考えた！

坂本　もしかすると父上を殺したのは叔父かもしれない……！

塩澤　と！　だが、確証はどこにも無かった。そこに現れたのが！

蓮　はっはっはっ、私だ！

塩澤　なんと、殺されたハムレットの父親が亡霊になって現れたのだ！

坂本　あんた誰だよ！？

蓮　お前の父親だよ！

坂本　あっ、父さん。

蓮　あっ、父さん。じゃないよ、父親の顔を忘れるな！

塩澤　ハムレットの父親は、一体何のために亡霊となったのか？

坂本　その真実はいかに！

蓮　俺は、尊敬する父上の死の真相を暴きだす！

高橋　さっき顔忘れてたよね？

塩澤　はっはっはっ、センキュー……カムバックエニータイム！

錬　さァ、全員の思いが交錯した時、ここに新たなハムレットが誕生する！

塩澤　先輩、僕の役は何ですか？

錬　案ずるな、とっておきの役が残っている。

塩澤　それは一体！？

一同　それは！

曲がカットアウト。

塩澤　フフフフフ！

全員、不敵に笑いながらはけていく。

錬　ちょっと先輩、待ってくださいよ！

錬も去る。

入ってくる坂本ハムレットとその父親。

ハム　それで……あなたは本当に、私の父上なんですか？

父親　だからさっきからそう言っているだろ、いい加減信じろ！

ハム　じゃあ俺の好きな食べ物は？

父親　日本ハムのベーコン！

ハム　歳は？

父親　16！

ハム　趣味は！

父親　アニメ鑑賞！ちなみに好きなアニメはハムパンマン！その趣味のせいで彼女とは長続きせず、付き合っては別れを繰り返している！その総数、実に16！にも関わらず全然めげない！七転び八起きとは言うものの、十六転び十七起きとはまさにお前のこと！

ハム　やめろやめろ、何でそんなことまで知っているんだ！分かったから、もうやめてくれ。頼むから……。それで父上、なぜ亡霊になってまで私のところに？

父親　実はお前に頼みたいことがあるんだ、ハムレット。

ハム　なんでしょうか？

父親　うすうす勘づいてはいたと思うが、私は弟のクローディアスに殺されたのだ。

ハム　何！？やはりそうでしたか、クローディアスが。奴の狙いは、やはり王座？

父親　恐らくな……そこでハムレットよ、お前には私の仇を取ってほしいんだ。このままでは、死んでも死にきれない！

ハム　分かりました父上、任せてください。私が奴に、復讐してみせましょう！

そこに入ってくる謎の2人の親子（？）。父・塩澤、息子・松本錬。

息子　ねえパパ！クモって空の上を八本足で歩きまわる虫のことだよね。

父　せがれよ、おまえはあれが八本足に見えるのかい。ちゃんとフクシューしておくんだよ。

ハム　その復習じゃなあぁぁい！

ハムレットは2人を追い出す。

ハム　復讐は、復縁したいハムレットの「復」に、復讐したいハムレットの「讐」だ！

父親　ハムレット、それは説明になっていないぞ！

ハム　とにかく……父上の仇は私がとりましょう。あの悪しきクローディアス、絶対に倒してご覧にいれましょう。

父親　それでこそハムレットだ。よし、行くぞ！

ハム　え？父上もいらっしゃるんですか？

父親　当然だ。
ハム　なぜです、幽霊じゃ何もできないじゃないですか。
父親　こんな私にだってできることくらいある。
ハム　何ですか？
父親　この間、「俺幽霊になったけど、何か質問ある？」ってネットに書き込んだら、いろんな人がたくさんの反応をしてくれたんだ。
ハム　父上、それは炎上してます。

2人去る。
入ってくるクローディアスと従者。

クロ　ありがとう、護衛はここまでで構わない。
従者　夕飯はどうなさいますか？コシヒカリ？あきたこまち？それとも僕？
クロ　まず一つに、私は冗談が嫌いだ。
従者　も、申し訳ありません！
クロ　それと、本当に夕飯がそれでいいと思っているのか？
従者　重ねて非礼をお詫びいたします！すぐにユメピリカをご用意いたします！
クロ　違う違う！お米以外の選択肢はないのかと聞いているんだ！
従者　ということはやはり、狙いは僕！？
クロ　だから違う！！……もういい、下がってくれ。
従者　はっ、失礼します。

従者去る。
クローディアスは天に祈る。
そこに入ってくるハムレットとその父親（幽霊）。
そしてもう一人の謎の男。

ハム　奴は今、日課であるお祈りの最中だ。殺すなら今が最大の好機。
父親　ハムレット、手が震えているぞ。
ハム　仕方ないじゃないですか、人を殺すのは初めてなんです。
男　誰だって最初はそうさ。だが、一人殺せば震えは止まり、二人殺せば恐怖は消え、三人殺せば愉悦に変わる。
ハム　そんなものですか？
男　そんなものさ。
ハム　では……行きます！

ハムレットはクローディアスの背後を取って構えるが。

クロ　私は、許されぬ罪を犯してしまった。私は出来心で、いけないことをしてしまった。
ハム　何！？
クロ　俺は悔いている。この罪は、いかにしても消すことはできないだろう。

父親　嘘つけお前！俺を殺したときめっちゃ喜んでただろ！？
クロ　俺は今自分の心臓が張り裂けそうだ！
父親　俺の心臓引き裂いただろ！
男　ハムレット構うな、あんな茶番に付き合うことは無い。
ハム　もちろんだ。今、奴の心臓を貫いてみせましょう！　たあああああああ！
クロ　どうか私を殺さないでくれ！
ハム　え、じゃあ……。
父親　いいからやれよ、早く！
男　やっちまえよ！
ハム　う、うわあああああ！

ハムレット混乱して後ろの二人を斬り落とす。

男　うわあああああああ！
父親　うわあああああああ！
クロ　何事だ！？
父親　お前危ないな！
ハム　すみません父上！つい！
父親　何がついだ、幽霊じゃなければ死んでたぞ！
ハム　ていうかもう死んでるじゃないですか！
クロ　貴様ハムレット、一体誰と会話しているんだ？
ハム　くっ、ばれてしまっては仕方がない。今ここにいるのは父上の幽霊と、そして……。

倒れた男の方に目をやる。

ハム　いやこいつ誰だよ！
クロ　知らねえよ！
ハム　父上の知り合いですか？
父親　さあ、知らんな。
ハム　まあいい！とにかく、死んだ父上の幽霊が教えてくれたのだ。自分を殺したのはクローディアス、お前だとな！
父親　ああ間違いない！多分！
ハム　え、たぶん？
父親　ああそうだ。多分、絶対！
ハム　もう勘弁してくださいよ父上！
クロ　幽霊だと？
ハム　とにかく、罪は償ってもらうぞ！

ハムレットは剣を構える。

クロ　待ってくれ、誤解なんだ！
ハム　何を今さら。
クロ　私は、兄を殺してなどいない。本当の敵は別にいる！
ハム　どういうことだ？
クロ　お前の父親を殺したのは……！

従者が小刀を抜き、クローディアスを刺す。

クロ　何っ、どういうことだ！？

従者　もう、お時間です。

死んだ男　ふっふっふっふっ、はっはっはっはっはっはっ！

ハム　貴様は、さっき死んだはず！

死んでた男　これくらいで死ぬワケがないだろ。

父親　待て、この身なりには見覚えがある。こんな黒い格好をしているのを、俺は一人しか知らない。

クロ　まさか、お前は！

3人　この台本の作者！！

起きあがる作者。

作者　そうだよ。

従者　無事クローディアスはやれました、死ぬのは時間の問題でしょう。

作者　よし、全ては計画通り。

クロ　おい作者、貴様の目的は一体？

父親　そんなの分かりきっているだろ。原作のハムレットと同じように、登場人物全員を殺すこと。この物語を悲劇として終わらせることだ！

ハム　そのために、作者自ら手を下したのか？

作者　そういうことだ。そして最後は……ハムレットお前一人だけだ。

ハム　お前たち、この芝居の最初に言ってたよな。今回こそ、真面目にやろうって。それは嘘だったのか？

作者　真面目にもいろいろな形がある。むしろ、これこそが真のハムレットと言っても過言ではない！

父親　過言だよ！

ハム　よく分かったよ。やはり俺は、殺されるわけにはいかない！

従者　何だと？

作者　どういうことか、聞かせてもらえるかな？

ハム　3年間、俺たちは試演会をやり続けた。その連鎖を断ち切る！うおおおおお！

シャキーン……一閃。

「セーブ・ユア・ソウル」

ハム　3年間待った。今こそこの試演会方式に、終止符を打つ！

作者　本当にそんなことができると思っているのか？

ハム　できるかできないかじゃない、やるんだ！

作者　論外！

殺陣。

ミュージカル風に。

しかしハムレットは切られほとんど致命傷。

作者　ふっはっはっはっ！だから言ったろ……この試演会は、未来永劫続く年末の風物詩になるのさ！

ハム　クローディアス！

作者　何、貴様生きていたのか！？

クローディアスは作者のことを抑える。

従者　くそ！

父親　おっと、お前には大人しくしていて貰おう！

従者を食い止める父親。

クロ　やれえええ！ハムレットおおおおお！

ハム　うおおおおおお！

クローディアスごと作者を斬る。

作者　くっ、はっはっはっ！気づかないのか？俺の思い通り、ハムレットもクローディアスも死んでいくということに！お前たちはもう負けたんだよ！

ハム　さっき、決闘を始める前……俺は確かに言った、秘策があると！

ハムレットは謎の石を取り出す。

作者　それはあああああ……ヒコー石！

父親　それを見たものはみんな盗んだバイクで走り出すという！？

作者　その非行じゃなーい！　俺の台本に別の作品の世界観を持ち込むなー！

ハム　お前がいなくても、台本は俺たちが書く！

父親　やっちまえええええ！

作者　やめろおおおおおお！

二人　ワロス！！！！

爆発音。

全ての照明フル点灯。

作者　目が、目がああああああ！

そんな明かりの中全員はける。

と、思い出したように塩澤振り返り、

塩澤　また皆さんと、この舞台で会えることを楽しみにしています。

塩澤去る。

鳴り響く曲もフェードアウト。

EPILOGUE

みんな終わって、ほっと一息。
大西と吉村。シャンシャンの格好をして出てくる。

吉村　僕たちどうして白黒かというと。
大西　白黒つけるってことだよ。
吉村　白か。
大西　黒か。
黒佐　……わたくしエンゼル。
大西　あなたじゃない。
黒佐　わ、わたくし、エンゼル黒佐と申しまして。えっ。（謎の男に撃ち殺される）グロさっ！
大西　僕たちが選ぶよ。
吉村　うん。
大西　さあ、どうしよう。
吉村　どうしよう。

カーテンコール。

坂本　まことに僭越ながら、役者紹介をさせていただきます。
ネオ　黒組、ネオ班。（紹介する。以下同じ）
波田野　白組、波田野班。
土屋　つづいて紅組、土屋班。
塩澤　最後は紫組、塩澤班。

リーダー出揃う。

大西　どれにしようかな、神様のいうとおり。
吉村　えーっ、じゃあ、笹の倒れた方向で。
大西　笹？
吉村　そう、笹。笹なら僕が持ってるよ。うまく倒れないね。

悩んでいると、赤い帽子の男が現れる。

小林　あ、あなたは！
全員　えッ！
菊池　天が呼ぶ、地が呼ぶ、（以下、必須）Hがしたいと俺を呼ぶ。私が広島東洋カープの菊池。
一同　……。
菊池　（力強くリピート）天が呼ぶ、地が呼ぶ、（以下、アドリブ禁止）Hがしたいと俺を呼ぶ。私が広島東洋カープの名セカンド・菊池。
一同　……。
菊池　（無視されるので）なんだなんだてめーら、ほーらぁ、ちょっと似てるでしょ。（ヒゲを誇示する）
石崎　なんの関係があるんだ。
菊池　野球関係だよ。

石崎　日本ハムじゃないのか。
菊池　同じ野球だろーがッ！
一同　けっ。
菊池　（キレる）菊池ビーム。（レーザービーム出る。半数倒れる）
半分　わー。
菊池　菊池カッター。（セカンドゴロ投げるようにカッター切れまくり。残り半数倒れる）
半分　わー。
菊池　はははは。
大西　どうしたらいいんだい、菊池選手。
吉村　困ってるんだよ、名手・菊池。
菊池　やっぱりここは、お客さんに選んでもらおう。（客席によいと思った班に拍手をお願いします。

順に並べて拍手を強要する。そこに倒れているが、該当するときだけ立つ。

菊池　○○班がよかったと思う人……ありがとうございます。（以下同じ）

壱位と最下位決める。（前者は塩澤班、後者は波田野班）

菊池　決まりましたね。優勝したからって、あした（実際はあさって）の打ち上げのスーパー銭湯・おふろの王様光が丘店で、料理が一品増えるだけですけどね。

しかし、しょせん土屋が演じる菊池の言うこと。説得力に乏しい。

最下位の班長　納得いかん！

最下位の組が反旗。殴りかかる。
菊池、劣勢。
あわれ、菊池は半裸。

菊池　あふーん、お嫁に行けなーい。（胸毛の中に隠れようとする）
一位の組の班長　待てーい。
菊池　助かるわ。

助けるわけではない。

菊池　え？

首をひねる菊池。
今度は「天才バカボン」のテーマかかる。
「これでいいのだっ」と全員でミュージカルのようにダンス＆殺陣。
全員、全身全霊。
しだいにスローモーション。

除夜の鐘か、ハムレットへの鎮魂の鐘か。ストップモーション。

おごそかに、幕。

第三章　上演記録

チラシその他の上演記録は以下のとおり。

CAST

黒組　澁谷班　澁谷新生　中山雄暉　麻生直樹　黒佐佳生（ただし、急病のため当日は高橋が代役）

白組　波田野班　波田野大祐　大野暁春　近藤陸　是枝大　吉村嶺

紅組　土屋班　土屋龍斗　石崎哲士　大橋建斗　川下大成　大西和弥

紫組　塩澤班　塩澤優希　小林蓮　高橋開成　坂本和俊　松本錬（チーム・アベンジャーズ）

STAFF

作・演出　小谷翔平

照明　石本雄大

音響　高木洋明　鈴木晴斗

作者の言葉　小谷翔平

獨協中学・高等学校　シェイクスピア・シリーズ第3弾をお届けします！　きっかけは……。いつも演劇のことを考えてるのに、じつは演劇のことをまったく知らないことに、はたと気づきました。そこで、少し勉強を始めたのです。グループに分かれて、同じ戯曲の同じシーンをどのように料理・演出するかの勝負。いつも夏合宿でやっている方式をお見せします。

これまでの流れ

第1弾（2015年）「ベニスの使用人――ベニスって何？」（作・演出　獨協太郎）

なぜかイタリア・ベネチアで公演を終えた獨協演劇部一行。興奮冷めやらぬ中、謎のイタリアンマフィアに先輩がさらわれた！　解放のための要求はただ一つ。明日までにもっとマトモな芝居を作れ――！

……というわけで3グループ、3人の気のふれたシャイロックが狂いまくる。

第2弾（2016年）「君の縄。シンロミオ」（作・演出　複写太郎）

シンゴジラは怪獣だから火を吐く。でも人間だって時には顔から火が出ることがある。先日、男子校特集、という触れ込みで、えんぶ（演劇ぶっく）の取材を受けた。そのとき、ひとりの部員が演劇ライターや編集者に向かって、あろうことかこう言いやがったのだ。「シェイクスピアに、マクベスってのがあるんですよ」。一瞬の沈黙。僕の顔から火が噴きだした。「プロ野球に巨人ってのがあるんですよ」「東京にスカイツリーがあるんですよ」レベルである。無知は罪。だから、シンロミオ。……というわけで、4グループ、4人の気のふれたジュリエットがゴジラに踏まれまくる。

――そして第3弾！　今度は登場人物が死にまくる四大悲劇の中でも最高傑作といわれるダイエット、いえ間違えました、ウォシュレット。違う。タブレット。近い。……ん？　僕たちは勉強を（ちょびっとだけ）しました！　その成果は！

茹でるべきか焼くべきか、それが演劇だ。（塩澤）
「あ」か「い」か「う」か「え」か、それが四段活用だ。（小林）
ちゃんとした芝居になるかただの茶番になるか、それがこの劇の問題だ。（土屋）
弱酸性か強酸性か、それがビオレだ。（波田野）
買うべきか買わざるべきか、それが買い物だ。（大野）
バターにするべきかマーガリンか、それがトーストだ。（坂本）
生きるべきか死ぬべきか、俺は生きる絶対に生きる。（澁谷）
染めるべきか染まるべきか、それが髪と人間性だ。（高橋）
天国か地獄か、それが死後だ。（石崎）
クリスマスにはプレゼントを貰うか、現金をもらうか、それが問題だ。（高木）
噛むべきか舐めるべきか、それがあめの食い方だ。（近藤）
貧乏で顔がいいか金持ちで顔が悪いか、もちろん金をとるけどな。（石本）
固めるべきか固めないべきか、それがワックスだ。（中山）
そもそも問題なのか問題でないのか、それでさえ問題だ。（大橋）
インスタにあげるべきか、ツイッターでさらすべきか、それがＳＮＳだ。（麻生）
遊ぶべきか何もしないべきか、それが休日だ。（松本）
気持ち悪いか気持ち悪くないか、それが私だ。（黒佐）
不老不死となり永遠とともに過ごすか、時来れば朽ちて他者の糧となるか、それが一生だ。（是枝）
逃げて勝つべきか立ち止まって英雄になるか、それは時代遅れだ。（鈴木）
陰キャか陽キャか、それが青春だ。（川下）
死ぬべきか死ぬべきか、死に方が問題だ。（大西）
Abe or not Abe , THAT IS THE 立●民主党だ。（顧問・山尾菓子折）

――どうか温かい目で見てやってください。

それにしても二〇一七年。何もない年ではなかったか。過ぎ去ってまだ二か月ほどでふりかえるが、ショウビジネスの世界でも、本当に何もなかった。「シンゴジラ」に「君の名は」、そして星野源の「恋」……いずれも前年の名残りである。流行語大賞はなんだったか、レコード大賞は……。おそらく国民のほとんどがすでに忘却の彼方。今年の漢字は「北」。Ｊアラートとモリカケ問題だけか。不毛な年。大谷選手のメジャー行も交渉解禁直後すぐにエンゼルスに決まり、いわば無風状態。そんな中での作劇であった。生徒も困っていた。肉一ポンドのベニスや毒をあおるロミジュリに比べて、ハムレットの「悩み」はいかにも地味。しかし継続は力なり。今回の客席は異様なまでに熱気を帯びていた。ここのところ継続して使用させていただいている京華女子高校の講堂なのだが、ついに真ん中一列の通路の部分にまで椅

子を並べないと入りきれない（それでも溢れた）状態になった。専門審査員・生徒審査員とも批評はおおむね好評。ただし、賞はまた「構成」を評価されての特別賞にとどまった。

第四章　活躍の場を広げて

前年に引き続きスタッフの斎藤さんから依頼電話を受け、演劇インカレでも上演することになった。

第６回全日本大学生演劇選手権『演劇インターカレッジ２０１７』
大学生演劇日本一決定戦
２０１７年９月２日（土）決勝本選大会！

演劇インカレで学生演劇界の長い長い歴史の中に〝新しい１ページ〟を刻もう！
大学演劇界最高峰の栄誉を目指すべく、大学生演劇インターカレッジで大学演劇界最高の〝大学演劇日本一〟の決定を目指します。

【２０１７年大会特別審査員】
三重竜太郎（開発プロジェクト／ぴあ株式会社）、他

決勝本戦進出団体
二松学舎大学「劇団こんにちはシアター」
早稲田大学「虚大空間」
学習院大学「劇団ミナナム」
宇都宮大学「宇都宮大学演劇研究会HTTP.jr」
東京工芸大学「劇団茶柱」
城西大学「劇団ASTEEя」
法政大学「法政大学Ｉ部演劇研究会」
他

【高校生以下エキシビジョン出演決定！】
獨協中学・高等学校 演劇部
千葉県立市川昴高等学校　演劇部

こちらは「蝶――世界を壊す一人の少年の物語」の抜粋を上演。そして同じ流れの年末の大会では、この「日本ハムレット」の塩澤班をチーム・アベンジャーズとして派遣した。

第五章　韓国にて

２０１７年のＴＯＫＹＯドラマフェスタ代表校・日大鶴ヶ丘高校とともに８月、渡韓した。今年からソウルではなく、韓国全国の持ち回りということで光州市の「アジア文化聖堂」という実に立派な劇場であった。顧問・村山大輔先生作の「恋の話」が観客を魅了。実にみずみずしい、「恋と告白」をめぐる傑作であった。前年に引き続いての字幕も完璧。
今年は初めて当該校への表彰トロフィーも用意されていた。日韓友

好ＴＯＫＹＯドラマフェスタ。京華女子高校の講堂から海外へ。また盛り上げていきたい。その意志を新たに再確認する機会ともなった。

黒組・澁谷班　小道具を使ってのダンス

白組・波田野班　クローディアスを倒す

紅組・土屋班　名作戯曲で遊びすぎだ！

紫組・塩澤班　斬りまくるハムレット

commissaire divisionnaire, commissaire central, 18 août 1969, objet : « *Nord-africains installés dans le campement de la digue des Français* ».

- ADAM, 207 W 133, Police urbaine de Nice, Compte-rendu d'intervention, 17 août 1971.
- ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français à Nice* » 12 septembre 1969
- ADAM, 177 W 494, Secrétariat d'Etat auprès du Ministère du Travail (Travailleurs immigrés), Programme urbain d'action à moyen terme en faveur des immigrés du département des Alpes-Maritimes (1976-1980).
- ADAM, 207 W133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français à Nice* » 12 septembre 1969
- ADAM, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « *Bulletin de Renseignements* », 9 juillet 1970.
- ADAM, 207 W 133, Direction de l'aménagement urbain, Paris le 27 mai 1974.
- ADAM, 207 W133, « *Le biconville de la digue Français à Nice, Population et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974

インタヴュー

- B. C. De M'saken, Date de l'interview : 9 octobre 2007.
- M. H. De M'saken. Date de l'interview : 15 décembre 2007.
- R. K. De M'saken. Date de l'interview : 21 décembre 2007.

新聞

- *Nice Matin*, 15 mars 1976
- *Nice-Matin*, 29 mai 1972.
- *L'OBS*, 09 février 2016 , « Calais, Paris... Les bidonvilles n'ont jamais disparu. Leur éradication est un mythe »

スラムという決して望ましくない環境ながら、そこで展開された人間関係は現代の個別化・孤立化とは正反対のものであった。ここではテンニースの「ゲゼルシャフト」と「ゲマインシャフト」を想起すべきである。移民は出稼ぎという目的に基づいて発生するが、出身地とは離れているとはいえ、むしろ離れているからこそ、相対的にゲマインシャフト的紐帯が求められ、成立している。出生地付近では結びつくことがなかったであろう人たちが長距離の移動を中長期的期間で行うことで相互扶助の必要性が生まれるが、それを出身地の地縁という形で実現を容易にしたものである。

5．参考文献

・青木輝憲（2011年）「ニースという都市とアフリカ系移民―移民への視線、移民からの視線―」in 宮島喬編『移民の社会的統合と排除―フランスの現状及び課題を中心に―』PP.81-93

・ ―― （2016）「国際観光都市における観光イメージと移民―ニースを事例に―」in『獨協中学・高等学校研究紀要』第29・30号

・ ―― （2017）「ニースにおける移民構成の歴史的経緯と差別」in『獨協中学・高等学校研究紀要』第31号

・GASTAUT, Y.,(2004) « Les bidonvilles, lieux d'exclusion et de marginalité en France durant les trente glorieuses », in *Cahiers de la Méditerranée*, Vol. 69

・RUGGIERO, dir.,(2006), *Nouvelle histoire de Nice*, édition Privat, Toulouse

・SHAW, C., and McKAY, H., (1969), *Juvenile delinquency and urban areas : a study of rates of delinquency in relation to differential characteristics of local communities in American cities / by Clifford R. Shaw and Henry D. McKay. With a new introd. by James F. Short, Jr., and new chapters updating delinquency data for Chicago and suburbs by Henry D. McKay*, University of Chicago Press, Chicago

・SHOR, R., et al. (2010), *Nice cosmopolite 1860-2010*, édition autrement, Paris

・Simon, G.,(1979) *L'espace des travailleurs tunisiens en France : structure et fonctionnement d'un champ migratoire international*, Poitiers

・YOUSFI, N.,(2009) «Les Tunisiens dans le bidonville de «la digue des Français» à Nice» in *Recherches Régionales*, no 194, Conseil Général Alpes-Maritimes

公文書館史料

・ADAM, 207 W122, « *Inventaire des bidonvilles du département des Alpes-Maritimes* »

・ADAM, 207 W125, fiche signalétique de la digue des Français, 1er mai 1971

・ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

・ADAM,207 W 133, Gendarmerie nationale, Compagnie de Nice, Rapport du chef d'escadron, commandant de la compagnie au Lieutenant-Colonel, commandant du groupement de Gendarmerie des Alpes-Maritimes, Nice, le 3 mars 1969.

・ADAM, 207 W 133, lettre du commissaire principal, chef adjoint de la sûreté urbaine au

黒人はそこまでして白人の中に入ろうとはしないため結果としてゲットーが維持されるというものである。

ニースのスラムについて適用を試みるならば、①に関して Collective Action Racism が近いようだが、スラムの成立過程からすると、相対的に低い家賃であることが決定的で、積極的な政策によるものではない。実際、マグレブ系の地区になったとはいえ元来はジプシーが建設したものだった。この点では所得との関係性を指摘した SHAW and McKAY（1942＝1969）のような古典的論究が最も当てはまる。換言すれば①の点はそれほど新しいものではない。だが、人種的には同一であっても国籍に相違があるという②の視点や国籍が同じであっても出身地が違う③はこれらでは上述した分類では論じ切れないながら、フランスにおける新規移民の到来を考えた場合、CUTLER and GLAESER による分類の Ports of Entry を更に進めることができる。

これまでの隔離に関する研究では、隔離するホスト社会からの視点が主体であった。しかし la digue des Français の場合、住居の区画分けが出身国別（チュニジアかアルジェリアか）でなされており、またグループ形成は出身の地域や村の別に基づいていた。この区別は、ホスト社会たるフランスやアルプ＝マリティーム県、ニース市といった行政レベルのような移民社会外部が働きかけた積極的なものではなく消極的隔離であり、移民自身が行った主体的隔離である。CUTLER and GLAESER の Decentralized Racism が最も近いようだが、彼らに従えば白人が黒人を隔離する論理ということになるところ、la digue des Français では自分たちの領域を自分たちで創出している、「逆ゲットー化」とも言うべき状態である。このことにより、国家や地域レベルで見た場合は「マグレブ系」として同一視されやすいものだが、アルジェリア系との相違が表出した。また、チュニジア系移民の間でも出身地による相違からグループ分けがなされたことは、構造的には同じである。グループの構成要素が細分化されたことで文化や風習、興味や必要とする情報が最適化され、よりスムーズにホスト社会への統合段階、すなわち「出身地・出身国・人種」の相違がより容易に克服されうる。抱える問題の内容や次元を共有しやすくなるためである。また、チュニジア系の場合には出国の時点で配される集団が既知で確定している点も、このシステムが機能する上で重要である。

4．結論

住環境は衛生面や健康面などから改善への政策が重視され、研究もその流れを追うものが多い。住環境の健全化は阻止されるべきものではなく、むしろ推進されなければならない。しかし、その政策的な観点に着目が集まるがゆえ、その内部で展開される人と人との関係性には焦点が当たらない。外部社会からスラムへの目線・評価は決していいものではない。だが、その内部にある濃密な人間関係や自助、自律的なシステムについては参照に値する。

こうした細分化された移民内の人間関係を可能にしたのは「逆ゲットー化」によってグループが形成されたためであった。価値観や文化を共有できる集団を主体的に形成していくことで、スムーズな運営を可能にした。

ニースの移民研究における既存の業績では日常的な移民の様態を捉えきれていなかったが、YOUSFI（2009）によって明らかとなった。また、移民・マイノリティ研究におけるこれまでの業績は外部社会からの視点による領域化が主体であったが、移民たちから生じるリスク細分化のためのグループ化も看過すべきではない。

が6時間触れさせられ理解していない専門用語などのフランス語を自分たちの中に取り込むためである。「フランス語は職員や現場責任者、注文や手荒く拒否する術、まれに個人的なやり取りで使用されるため、労働者が疎外されていると感じるものとなっている[39]」とあるように、フランスでの生活をより可能にする機能もスラムは担っていた。

商業があることによって、移民コミュニティでは治安の機能を果たす。友人やいとこ、兄弟の店は閉じこもったり、社会的な場所、同郷の人たちと会って交流する場所、情報が集まったりする場所である。スラム居住者の証言によると、カフェはすべての出身地が入り混じったチュニジア人の交流の場である。この場所で様々な情報のやり取りがなされる。前述したように、新たな到来者があれば彼らから外部の情報を入手し、フランスでの日常生活や労働で必要なことを知ることができる場であった。

3．スラム la digue des Français に対する社会科学上の位置づけ

移民自身のライフ・ヒストリーに着目しつつ国際社会学の観点からは、移民発生のメカニズムとしてプッシュ・プル要因の分析を行ってきた。移民やマイノリティの研究では、ある区画に移民もしくは移民出自の子弟が多く暮らす場所について、主にアメリカではあるが、人種隔離の観点から考察されてきた。

本稿で見てきたチュニジア系移民は、移民として渡仏するに至った状況はここでは不明である。少なくとも男性の単身移民であったため、フランスでの単純労働に従事し、金銭を得ようとするものであることは容易に推測できる。こうしたプッシュ要因は明らかであるものの、新たな様相というわけでもない。

スラム「la digue des Français」に対しては3つの視点が不可欠である。①スラムに対する外部社会からの目線、例えば市の当局者や報道のされ方などを参照する視点②チュニジア系移民から見たアルジェリア系移民という視点③チュニジア系移民の中という視点である。

これら3点について考察すべく、既存の業績のいくつかをまとめる。まずは CUTLER and GLAESER（2017）による人種隔離としてのゲットーに関する業績の分類（PP.475–477）を参考にする。スラムには社会経済的指標によって分けられた人たちが区画化された地域に集住することになるため、ゲットーに関する研究との類似点は想定できる。

まずは Ports of Entry である。この考え方によると、ゲットーによってある集団が新しい環境に同化しやすくなる。昨今の移民は社会的環境を再構築し、故郷の消費財を見つけるために1つの集団を形成する。次に Collective Action Racism である。ゲットーが国人からの隔離を強めるために白人が行う集団行動の結果であるとする。集団行動には人種別の区画分けや黒人への販売を禁ずる取り決めといった政策手段や黒人が白人の近隣へ来ないようにするための暴力や実力行使が含まれる。最後に Decentralized Racism である。黒人を排除しようとする集団行動とは対照的に、白人個人が他の白人と暮らそうと思うことによって起こる人種隔離がなかったとしてもゲットーが白人によって維持されてしまうことがある。白人が白人の環境の中で生活しようと、その対価としてより高い生活費を払う。

39 ADAM, 207 W 133, « *Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974.

があった[33]。

「住宅業」以外にも、スラムでは経済活動が発展した。1973年11月には51軒のカフェ、21軒の食料品店、14軒の肉屋、15軒の洋品店、２軒のテーラー、４軒の理容店、１軒のバイク修理屋がいた。こうしたスラムでの商売はマグレブ系の不動産で行われた。商売をしている大半の人たちは商売の利益だけで彼らの全収入を得ていた。しかし、商業活動をしてより多くの収入を得ようとする給与所得者の不動産所有者による業態もあった。しばしば、商売を展開する労働者のグループがいたということだ。こうした商業活動は、スラムに住む人たちだけでなく、ニースの他の地域に住むマグレブ系の人たちにとっても興味深いものであった。「たった１人の飲料や食料品の卸売業者であるヨーロッパ人が la digue des Français へ商品を納めた。彼はスラムに複数の商業地、ビストロ、食料品店を所有し、マグレブ系の人に管理を任せていた」[34]。多くのお店は朝６時から夜10時まで開いていた。洋品店は土曜日、日曜日のみ開いており、スラム以外のところに住む人たちや買い物に来た人たちも来店できた。

スラムは2000人のマグレブ系労働者が住む場所というだけでなく、アルプ＝マリティームに住む他の多くの北アフリカ系移民にとっても出会いや交換の場所であった。他の場所ではできないような文化を思い出し、生活することができた。アラブの伝統的な市場を髣髴させ、情報を交換し、問題について議論することで、「移民の文化的な必要性が満たされる[35]」。週末にはすべての店舗が開店しており、市内の他の地域からマグレブ系の人たちが買い物に来たり、親や友人を訪ねたりしており、アラブの市場のような雰囲気がある。「スラムがチュニジア系コミュニティ全体の集まる場所になった[36]」。すべての人がスラムに集まる唯一の時は週末の土曜日と日曜日だ。「しかし最近、スラムは多くのマグレブ系非住民たちが散歩したり買い物をしたりする場所になってしまっており、『スラム住民』は彼らが心配するのは本質的に買い物や気晴らし、まれではあるが性的な消費をすることになっている[37]」。「…日曜日には、雰囲気が休日のものになっている。食堂は忙しく、男はあばら家でカードをし、他の多くの人たちは中央通りを歩き、女の子は店の裏で売春をしている。酔っ払った男性もいる。ターン・テーブルではアラブやヨーロッパの曲が流れる。…[38]」ここで見たように、スラムは経済的機能もさることながら出身地を思い出させる文化的機能も果たしていた。

スラムで商業が拡大したのは、経済的機能そのもの以上に、同郷者たちとの社会化や交流がゆえと思われる。店員との会話は、就業時間中に自分が孤立していると分かっている顧客を「個性的に」し、社会的にするための言い訳である。商人と母語でやり取りするのは、１日の仕事から帰って、労働者

33 ADAM, 207 W 133, « Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures » Rapport SONACOTRA, 1974.

34 25ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

35 ADAM, 207 W 133, « *Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974.

36 ADAM, 207 W 133, lettre du commissaire principal, chef adjoint de la sûreté urbaine au commissaire divisionnaire, commissaire central, 18 août 1969, objet : « *Nord-africains installés dans le campement de la digue des Français* »

37 ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

38 ADAM,207 W 133, Gendarmerie nationale, Compagnie de Nice, Rapport du chef d'escadron, commandant de la compagnie au Lieutenant-Colonel, commandant du groupement de Gendarmerie des Alpes-Maritimes, Nice, le 3 mars 1969.

調しながら暮らすアルジェリア人たちとは異なり、チュニジア人コミュニティの中では、移民のチュニジアでの各々の地域別によって地理的な住み分けが行われた。各々の地区はそれぞれの村のコミュニティによって分けられた。それらのグループは基本的には血縁関係に基づいて、完全に地理的に分離されていた。出身の村において家族はお互いに関係性を維持している。同様にスラムでも、グループは本人がいた村と同じ所属のグループ以外に入ることは出来ない。スラムにおけるあばら家の住居は社会的な同一性と合致する。スラムに住む76%のチュニジア人があばら家で共同生活をしており、61%は両親と、15%は友人とであった。こうした措置は出身地別グループ間の関係を促したり、スラムの区画において場所の配置を明確にしたりする。そうすることで、すべての同郷グループがスラム内において地理的に配置されることになる。「コミュニティという言葉はチュニジア人には適用されない。グループが違うことは相違や隔たりでわかる。各々のグループは独立したユニットとなっている[31]」。こうしたスラムにおける組織化によって社会地理的に同じグループに属していることによって移民を連帯させ、そうした結びつきを空間的にわかりやすくしている。スラムでは、グループというものは社会的空間においてグループ間の関係を示し、グローバルな外部社会との関係を表すという2つの意味において位置づけられる。アルジェリア系とチュニジア系とが住居区画を別にしていることで、少なくともチュニジア系からアルジェリア系への、ある種のスティグマ化が起こっていた。「la digue des Français に入居した3人のチュニジア人からの証言により、「グループ」という言葉には認識と定義が別のものである。アルジェリア人コミュニティとの間に感覚の相違が考えられる。聞き取り調査を行った人たちは2つの国別コミュニティをはっきりと区別した。「我々チュニジア人は問題を避け、法を重んじる。アルジェリア人は喧嘩をしようとし、地方自治体に警察のスラムを監視させてしまうようにしてしまう[32]」。la digue des Français では、大きくチュニジア系とアルジェリア系とで住居区画が別になり、またチュニジア系移民の中でも出身地によってグループ分けが起こっていた。このようにして価値観の共有がしやすい環境を得て、コミュニケーションがスムーズに行われやすくなっていた一方で、グループ間、特に国籍別となると、その差が大きく感じられた。

2.2. スラム内での商業と人間関係

スラムでの経済活動は宿泊業が主要である。実際、多くの移民にとって雨風を防ぐ生活の場ではあるが、スラムは、ある意味では、優れた経済活動でもある。分譲はたったの40%で、60%は賃貸であった。最初の購入者はスラムの土地使用権を取得した。la digue des Français で最初で建設されたあばら家は、スラムへ新たに来た人たちに転売された。新たな所有者は出身国やフランスの新たなところへ引っ越す際に転売する。1973年の後半では、建築方法によってではあるが、500から2000フランの間で値段が交渉されていた。実際に、あばら家は労働者や労働者のグループへあばら家を貸すといった営利を目的とした商売をする上で、本当の「信頼」の資産であった。賃貸料金は、建築方法にもよるが、30から100フランであった。すべてマグレブ系ではあったが、スラムに住んでいない不動産所有者は賃貸料で生活していた。1人で10以上のあばら家を所有し、40人の労働者に貸していた人もいた。この人については平均的には1人当たり60フランを支払わせていたので、2400フランの収入

31 20ADAM, 207 W 133, « *Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974.

32 B. C. De M'saken, Date de l'interview : 9 octobre 2007.

地方の労働市場、日々抱える困難なこと、移民に関する新たな行政措置、それぞれの製品や荷物の値段についてのデータや情報を交換するのにも有効である。」[27] この聞き取り調査からも明らかなように、彼らは外部の最新情報を抱えて到来しており、貴重な情報源であった。故郷についての情報は旧移民たちにとって直接的な見聞きややり取りの難しいが最も興味のある事柄の1つであり、フランスでの彼らの立場に関する情報は、その後の生活に直接関わってくる。

スラムへの到来がアルプ＝マリティームにおける道のりの新たな1歩となる移民もいる。YOUSFIが聞き取り調査をした1人はM'sakenに生まれ、1968年にフランスへ来た。カンヌで4年間、2人のアルジェリア人と部屋を共有し、ニースへ来た。3か月間、Ariane周辺にあったKébili出身の同郷者のところに住んだ。「『川』スラムの建築現場で2人のM'saken出身者と出会えた。彼らは2人ともフランスへ来てからそこに住んでいて、そしてそう思えたのだが、ともにスラムに満足しているようだった。それで私は新たな知り合いの近くに引っ越そうと思った。」[28] スラムへの到来がフランスへの到来を意味するものもいれば、個人的な人間関係からスラムのことを知り、やってくるものもいた。

スラムの構成するグループの区分けは、間違いなく出身社会の別によって為されていた。実際、スラムの社会構造を示す集団態度は移民たちの出身地における働きや社会の掟に影響を受けている。スラムは、確かに地理的・社会的にフランス的なやり方で位置づけられはするが、出身や居住の緊密な社会との関係をそのままに残している。出身社会のアイデンティティから来ているのだ。個人は、スラムのグループの一員ではあるが、価値観や態度、興味といったものにも集合的に共有するものだ。この要素はグループの一体感を強固にし、メンバーの間の団結の基礎をなす。

M'saken出身者たちは、自分たちが同種のものであり、「他のチュニジア人」とは異なった全くの別物であると思っている。「『川』に住むM'saken出身者はみんな知っていて、同じ場所に住んでいる。スラムの路地や店舗ではチュニジアの他の地域から来た労働者も受け入れているが、地域それぞれのグループは他のチュニジアのグループとは距離を保つ。私たちは出身の村別に集まっている。地区全体にM'saken出身のチュニジア人が住み、他のところではKébiliの同郷者たちが住み、Kef（チュニジア北西部）から来たチュニジア人はまた別のところに住んでいる[29]」。スラムは移民たちが家族内や出身の村、出身地からだと安全で連帯感が得られる場所である。さらに、「コミュニティ内での生活することによって、そこで住む人たちは日常的な基本的サーヴィスが得られ、敵対的な外部との接触を避けられる」[30] のだが、限定的に開かれた外部の人間の到来と内部における連帯によって、ある種の秩序や自治も生まれた。

スラムの居住者が入ってくることはナショナル・アイデンティティと同様に出身地域における所属集団によっても決定される。チュニジア人もしくはアルジェリア人のあばら家で占有されている商業の中心地を除くと、相互に異なる国籍の地区間には明らかな分離があることがわかる。南から北へ、スラムの中央大通りに従って、以下のような構造になっている。まずはチュニジア人のもの、そしてアルジェリア人のもの。それから小規模なチュニジア人街が続き、そしてアルジェリア人街になる。そしてスラムの北半分は主としてチュニジア人によって占有されている。出身地の別によらず協

27 M. H. De M'saken. Date de l'interview : 15 décembre 2007.
28 B. C. De M'saken, Date de l'interview : 9 octobre 2007.
39 R. K. De M'saken. Date de l'interview : 21 décembre 2007.
30 Simon, G., *L'espace des travailleurs tunisiens en France : structure et fonctionnement d'un champ migratoire international*, Poitiers, 1979, P.201

ニジアの地域から来ていたことが分かるが、Kébili や M'saken といったチュニジア南部や中部東側が主体である。これら２つの地域でスラムにやってきたチュニジア人の68％を占めていた。総数329人のうち半数以上の172人が Kébili 出身で、M'sakenは54人であった。同じ名簿からすると、1969年にスラムにやってきたチュニジア人はみな男性である。家族や子どもはいない。ほとんどは結婚していたが、単身での渡来であった。年齢層は18から50歳で、20から35歳が大多数であったが、スラムに住むチュニジア人労働者の71％にあたる。

個人でスラム・コミュニティへやってきた人たちは、自分の意志でやってきたケースはなく、要請に応えるものであった。最初にスラムやってきた人たちで、国別のグループがあちこちで形成され、そして再びグループ化されていったのである。グループ形成は基本的には出身地の家族などの所属によって決定された。何よりも、スラムはニースへやってきた人たちにとって、最初の住所となる。さらに21人の M'saken 出身者と107人の Kébili 出身の労働者は１人もしくは複数の兄弟と再会する形でスラムにやってきていた。

移民の中には la digue des Français に住もうとやってきた者もいた。彼らは出身地を出る際、多かれ少なかれスラムに関するあらゆる情報を手にしていた。la digue des Français のイメージである川はチュニジアと結び付けられていた。このようなスラム住民から得られた言葉はフランス国境を越えチュニジアの出身地において広められた。ニースで家族と再会できなくとも、新たな到来者たちは知人や近所、友人といった人たちを頼りにスラムで居住できると確信していた。Yousfi が行った聞き取り調査では、M'saken 出身者たちにとって、スラムは M'saken たちがニースで最初に合流する場所として知られていた。「フランスへ向かう前、私はニースで「川（= la digue des Français を意味している)」と言うのが聞こえた。そのことは M'saken では知られていたものだった。多くの M'saken 出身者がそこには住んでいた。ニース空港についたとき、私を知っていると思われる４人の同郷人グループに『川』の正確な住所を教えてほしいと頼んだ。だから私はそこに住めると思ったのだ。Kébili 出身で、la digue des Français に住む人と会った。こうした同郷人のつながりがあったから、M'saken の出身者たちの地区へたどり着いたのだ。私は M'sakin の古い知り合いである M(E.K.) のあばら家を探した。この人だけがニースでの知り合いだ[25]」。その人物は E.K. のもとへたどり着き、それゆえにそのあばら家がどのようなものであったかを描くことができる。「あばら家の前に着いて、木製の厚い合わせ板でできたドアを叩いた。湿気っぽく、締め切った空気で、人の寝汗といった、混ざったにおいのする小さな暗い部屋がその中には１つあった。私はそのあばら家で E.K. と他２人の M'saken 出身者とともに共同生活をした。特にほこりやにおい、ねずみといった、衛生上劣悪な状況に合わせられるようには準備してこなかったので、到着した最初の週はとても大変だった。次第に、その住まいになじんできた。１日労働をして、夕方にくたくたになってスラムに戻って、周囲のことなど気にすることもなく眠った[26]」という証言はスラムでの生活を始める頃の様子をよく表している。

スラムへやってくる新規移民は、単なる人口の増加や同胞が増える以上の意味があった。「『出身地(bled)』から来る人たちは新たな情報を持ってくる。新しくやってきた者は、『田舎では雨がふったか？』オリーブの収穫状況、出身の村での出来事を聞くべく、友人や同郷人に囲まれる。移民がすべてを知っているので、多くのニュースを聞けることで彼らは故郷へ帰った気分になれる。店はニースとニース

25　M. H. De M'saken. Date de l'interview : 15 décembre 2007.
26　M. H. De M'saken. Date de l'interview : 15 décembre 2007.

確信している。この窃盗は、間違いなくスラムで再販業者として働く年配のリーダーたちによって導かれた若いヨーロッパ人によって行われるようだ。小型バイクはスラムで解体・組み立てられ、マグレブ人に売られる。…[19]」スラムにおける犯罪の不可視性により、犯罪者の到来のみならず、犯罪の温床ともなっていた。

犯罪の問題の他にも、スラムには健康上の問題もある。「衛生対策はなされていない。水を入れる簡単な洗面器を売春婦は1日の仕事に使う。そのうちたったの6から7人だけが定期的な医療訪問を受ける。多くの性病が発症したと届け出があったようだ。衛生上の規制は事実上存在せず、多くの場合、性病はニース市全体にとって本当に危険である。スラムのすぐそばに廃棄物や生活廃棄物が溜め置かれ、齧歯目類の増殖もあって、大流行の危険が引き続く。…」[20] 実際住居における水回りの劣悪な状況は出身地のものよりもひどく、SONACOTRA や他の都市へ引っ越した人たちはスラムを評価し、後悔している。

ニースにおける北アフリカ人のスラム街「la digue des Français」は売春と斡旋業者が普通にいる、本当の中心地になったのだと分かった。「実際、28から30人の売春婦がいる。さらに、ニースとその周辺地域に住む未成年者は、時々ここで売春をする。…[21]」スラムでの売春は、売春婦と売春斡旋業者双方にとって利益の多い業種である。売春の相場は5から15フランで、収入金額は斡旋業者とそこの食堂の経営者で山分けされる[22]。売春はスラムでは女性にとって存在する唯一の形態だ。独身者や結婚して単身で来ている人たちの生活の中で売春が占める位置の問題を提起しなければならない。実際には、売春は性的満足の単なる「目的」としてしか認識ない。純粋に性的な意味以外では深刻な関係性はない[23]。スラムでの売春の横行は男性単身の移住であることを加味しつつも、衛生上の問題を否めない。女性の活躍の場が限られていたことを相俟って、スラムの問題を表出している。

2．スラムにおける人間関係

2.1. スラムまでの道のりにおける人間関係

スラムは無秩序で無政府状態であったため、土地の利用状況を管理する公的機関はなく、見えにくい。生活は集団生活を送っていて、生活関連のものは近所付き合いでのものもあったが、いくつかの建物に集約されていた。集団形成は同じ社会的属性で形成されたが、改変されることもあったが、新しい生活環境での実情と出身地域や村落に基づいてなされ、自警や出自文化を重要視するか否かが反映された。

チュニジア人のスラムへの入退去を調査するために名簿は県の当局者がとっていた[24]。このリストによって誕生日や出身地、家族状況、雇用主や勤務先についての正確な情報を得られる。すべてのチュ

19 ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974

20 ADAM, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « *Bulletin de Renseignements* », 9 juillet 1970.

21 ADAM, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « *Bulletin de Renseignements* », 9 juillet 1970.

22 ADAM,207 W 133, Gendarmerie nationale, Compagnie de Nice, Rapport du chef d'escadron, commandant de la compagnie au Lieutenant-Colonel, commandant du groupement de Gendarmerie des Alpes-Maritimes, Nice, le 3 mars 1969.

23 ADAM, 207 W 133, « *Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974.

24 ADAM, 207 W 133, lettre du commissaire principal, chef adjoint de la sûreté urbaine au commissaire divisionnaire, commissaire central, 18 août 1969, objet : « *Nord-africains installés dans le campement de la digue des Français* ».

1．2．スラムに見られた諸問題

当局者によると、スラムは経済的無法地帯である。申請や許可なしに、規制もなく、動物が屠殺され切り売られ、管理されず非衛生的に売られるようなさまざまな商売が発展した。スラムでの価格設定は、税金がかかっていないことを考えると、事業主は通常の３倍の利益を得ている。実際、事業主は何の管理もしていない。利益の全額は税金や責務といった控除なしに、事業主が持って行く[12]。

スラムは囚人と犯罪者の隠れ蓑だ[13]とあるように、市の当局者はスラムが犯罪の温床であると描写する。スラムの様々な「経済活動の主体」は絶え間ない競争の中にいる。「…この地域での争いは、しばしば武力的な争いにつながる。利権はアルジェリア系、チュニジア系カビール人といった別々の集団間の敵意を増幅させ、毎週争いと収支の決着という結果になる。…[14]」スラムのバー店主の中には、自分自身と店を守るために武装するものもいる。「紛争はこの地域を支配しており、グループは求めに応じて、ライバルのバーの経営者に対してトラブルを巻き起こし、従業員が働けないようにしたりする。こうした介入は、通常発砲事件にまで発展する。実行したグループは与えられた作業に対して支払われる。…[15]」1971年８月17日、スラムは「攻撃的な来訪者たち」とスラム居住者間の紛争の舞台となった。ニースの様々な地域に住む16人のチュニジア人は、同胞からの喧嘩を探して、拳銃と斧で武装したスラムにやって来た。争いの中、４人のチュニジア人が負傷し、３人は軽傷、１人が重傷を負った。警察によると、争いの原因は家族間の争いであった[16]。ニースの日刊紙 Nice Matin は北アフリカ人２人の間に起こった争いを採り上げた。「昨日朝、グルノーブルの170号線にあるスラム街「la digue des Français」において、北アフリカ人の間で争いが起こった。1947年９月12日チュニジア Kébili 生まれの B.M.が1941年５月15日Kercha 生まれの A.O. に拳銃を取り出し、威嚇した。目撃者が入り、警察も到着し、武器を放棄させた[17]」。このように、スラムでは移民間の武力衝突がしばしば起こっていた。

市の当局者にとって、スラムは居住地であるばかりでなく、移民を苦しめる多様な疑惑を逃れることができる場所でもある。そこは、短期・長期によらず、様々な犯罪者が隠れ蓑を探すのに役立っている。土地の占有が複雑であるため、当局者と同様に住民の間でも「Cache（隠れ場所）」という言葉が出てきている。「スラムの車両には、警察と憲兵の無線周波数にあらかじめ合わせてあるラジオを積んでいるものがある。さらに、スラムは高い場所に設置された見張り櫓で守られている。こうした予防措置によって、介入されにくくなっている。多くの犯罪者、囚人などはそこ（スラム）で隠れ蓑を探す。スラムはニース地域でも犯罪者の居住者集中率が高い場所になる前兆がある[18]」。暴力を引き起こす人々自身のみならず犯罪者もスラムは呼び込んでいる。

また、多かれ少なかれ、多少でも非合法な条件で取得された多くのもの、特に小型バイクなどがスラムに入り、出ていく。「こうした小型バイクを盗んで調達するのは北アフリカの労働者ではないと

12 ADAM, 207 W 133, « *Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974.
13 ADAM, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « *Bulletin de Renseignements* », 9 juillet 1970.
14 ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français sur la rive gauche du Var* » 30 juillet 1970
15 A.D.A.M, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « *Bulletin de Renseignements* », 9 juillet 1970.
16 ADAM, 207 W 133, Police urbaine de Nice, Compte-rendu d'intervention, 17 août 1971.
17 Nice-Matin, 29 mai 1972.
18 ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français sur la rive gauche du Var* » 30 juillet 1970.

が請願書に署名し、地区住民の恐れが示された。その後、地元で選出された人たちによって移民労働者が自分たちの土地に入ってくることに対する全住民の反対意見が公然と発表された。そもそも隔離的な状況を好ましく思っていたものもいて、「この村（= la digue des Français）の住民は、1日の労働が終わると、小さな北アフリカの島へ帰宅を急ぐ。彼らはそこで、伝統的な環境を見つけ、居心地の悪さに苦しむ。彼らは幸せで、人に迷惑をかけたりしない。彼らはもう街には来ない。それゆえにビーチや遊歩道、ジャン・メドゥサン大通りでふらついているやつらが減ったのです。警察はそれに気付き、歓迎している。彼らの管理が容易になるのだ。」[5]と述べられたほどである。しかし、「水質汚染の危険を避け、北アフリカ人に最低限の衛生状態を保障するためには、いくつかの措置を講じなければならない」[6]とし、衛生状態の悪化を避けるため、市の当局者はスラムでいくつかの作業を行っている。主要通路は固められ、すべてアスファルトになっている。水の流れが滞るのを避けるためにマンホールと排水路が通りの低い場所何か所かに設置された。スラムに水のポンプが5つ設置された。こうした処置のための財政的・人的負担の多さから、結局は移住計画が実行されることとなった。その際にはスラムで形成されていたグループといった社会構造やその機能を重視し、崩壊させないよう配慮された。

YOUSFI（2009）は人口増加の様相についてもまとめている。「1968年12月31日、スラムには125のあばら家をアルジェリア人404人、チュニジア人45人、モロッコ人10人が住んでいた。」[7]「1969年8月13日に実施された監査では、チュニジア人329人、アルジェリア人113人、モロッコ人4人を数えており、170棟のあばら家に住んでいた。」[8]「1971年5月1日、la digue des Français には379棟のあばら家があり、チュニジア人349人、アルジェリア人325人、モロッコ人2人が住んでいた」。1973年終わりには la digue des Français に住む人の数は1980で、うち60%がチュニジア人で、残りはアルジェリア国籍の人たちであった[10]」。「1976年5月の段階的解体前には1200人の住民がおり、65%がチュニジア人、35%がアルジェリア人であった。」[11] 特に1968年から1969年にかけての変化が顕著である。アルジェリア系移民が404人から113人へと4分の1に減少したのに対し、チュニジア系移民は45人から329人へと約8倍に増えている。1971年にはチュニジア系移民とアルジェリア系移民とはほぼ同数になっていた。プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュールへの移民流入数は、確かに1965年以降にはチュニジア系とアルジェリア系とでは波が逆転しており、チュニジア系の到来が多かった。しかし、地方レベルのマクロな視点だけでなく、プッシュ／プル要因といったミクロなレベルでの考察を試みれば、チュニジア系移民は引き寄せやすく、その場に留まる傾向があったと思われる。

---

5 ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français à Nice* » 12 septembre 1969

6 ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français à Nice* » 12 septembre 1969

7 ADAM, 207 W122, « *Inventaire des bidonvilles du département des Alpes-Maritimes* »

8 ADAM, 207 W133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français à Nice* » 12 septembre 1969

9 ADAM, 207 W125, fiche signalétique de la digue des Français, 1er mai 1971

10 ADAM, 207 W133, « *Le biconville de la digue Français à Nice, Population et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974

11 *Nice Matin*, 15 mars 1976

pour les travailleurs algeriens) といったアルジェリア独立戦争が原因となったフランスにおける受け入れ住居の確保という経緯があった。本稿で着目するのは SONACOTRA を相対化しながら考察すべき頃の問題である。

1．スラム「la digue des Français」の発足と発展

1．1．スラム「la digue des Français」の概要

ニースの西方 Var 側沿いにあばら家が並び始めたのは1963年から64年にかけてのことで、当時はジプシーたちが住んでいた。5月から10月にかけては放浪者のような生活をしていた彼らは11月から4月は la digue des Français に定住していた。20から25家族、180人から200人ほどが住み、5月から10月の間は老人や女性、子供といった数家族のジプシーが残っていた。観光用パスポートで渡仏した労働者としてマグレブ系が la digue des Français に到来したのは1964年末から1965年初めにかけてであった。チュニジア人の多くはジプシーとのやり取りを踏まえてあばら家を建てた。1966年に la digue des Français は急速に拡大し、1967年に移民の第2の波が到来、その内訳はチュニジア系が最多で、アルジェリア系がその後に続いた。同年中ごろにはジプシーは la digue des Français を去っている。「あばら家はチュニジア系、そしてアルジェリア系といった新たな到来者たちによって占拠されることとなった。」とあるようにスラムの発端はジプシーであったが、マグレブ系移民が到来することで、様相が変わってきた。

このスラム街に住みついたマグレブ系の大部分はすでにフランスにおいて数か月、もしくは1年以上過ごしており、「la digue des Français」に到来したということは、ニースの他の地域にあるスラムを追い出されて Saint-André-de Nice に建設された SONACOTRA にも入れなかった人たちであった。「SONACOTRA での居住が認められなかった北アフリカの人たちのことを思うと、そして休む場所がない人のことを思うと…スラムの段階的解消を進める各々の計画がある一方で、建築中の家を探してあちこち回り、長距離バスを仮の宿とする北アフリカ人たちのことを思うと、la digue des Français と呼ばれるスラム建設を進め、発展させていくのだ。」という証言は彼らが SONACOTRA への入居を希望していたにも関わらず、できなかった人たちであり、スラムがそれを補完する役割を果たそうとしていたのがわかる。あばら家には「平均面積は6㎡、天井までの平均の高さは1.90mで入口のたった1つしかない。商店用は平均面積15㎡で、門が1つに窓が2つついていた。」[4]後述するが、このような狭い家に複数の人が住み、水回りや衛生状況が劣悪であったことから、決して望ましい環境ではなかった。この、フランス最後で最大級のスラムの1つ「la digue des Français」は1976年5月16日に撤去された。スラム街を避難退去させる前に、市の当局者は、「la digue des Français」にいたマグレブ系を住まわせられる3つの SONACOTRA を建設することにした。当初、地元世論が新しい SONACOTRA の施設の建設に対して不信感を持っているために、スラム「la digue des Français」の段階的解体が延期されている。まず、ニースの Riquier 地区に建築するプロジェクトでは、1000人以上

2 ADAM, 207 W133, « *Le biconville de la digue Français à Nice, Population et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974

3 ADAM, 207 W133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français à Nice* » 12 septembre 1969

4 ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

ニースのスラム「la digue des Français」における チュニジア系移民 ―スラムの問題と機能―

青　木　輝　憲

0．はじめに

都市化の流れの中で住環境の整備は、特に欧米社会においては進んできた。不衛生な場所が発生すると封鎖し、ホームレスの居所は「整備」などの名目で立ち入りが禁じられたりする。かくして現代都市では「スラム」は死語と化しているようにも思える。しかし、イギリスが対岸にあり、海峡の名前の由来にもなっているカレーで最大級のスラムが解体に向かったことがニュースとなった[1]。2017年11月28日にパリ18区にあったスラムが解体されたとニュースにもなっている。スラムは現代においても全く消えてはいないのである。

フランスで昨今報じられたスラムのニュースは必ずしも移民と結びついたものではないが、ニースに1975年まで機能していたスラムは移民のものであった。これまでのニースにおける社会学的移民研究は流入の時期と数の因果関係（青木（2017）など）や移民の現状（青木（2011）など）、ニースの主要産業たる観光業との関係（青木（2016）など）が挙げられる。歴史学ではRUGGIERO, dir（2006）がニースの歴史を振り返る中で、1950年代中ごろに戦後復興の急速な進展と脱植民地化からアルジェリア系移民が帰還者として増えたこと（P.255）を指摘し、SHOR, et al(2010) はニースに渡来した移民の出身国が多岐にわたっており、コスモポリタンな空間が出来上がってきたことを指摘した。

確かにニースの移民比率は高く、歴史的・地理的要因も無視できない。しかし、到来してからの個人レベルでの動きや生活にはあまり目が向けられてきていない。そこで本稿ではアルプ＝マリティーム県の公文書館であるADAM(Archives des Alpes-Maritimes) からのデータをまとめたYOUSFI (2009) を中心に、1960年代から1970年代のニースにあったスラム「la digue des Français」に注目する。GASTAUT (2004) は戦後から約30年間続いた、いわゆる「栄光の30年（trente glorieuses）」の中で、フランスにおける差別的な扱いを明らかにした。確かにスラムは社会的に高い評価を受ける場所ではなく、それは「la digue des Français」でも同様であった。だが、それだけでは論じ切れていない部分もある。ゆえに本稿では「la digue des Français」に関し、成立から評価、実態について見た上で、既存の貧民街研究の中で位置付けを試みる。

フランスにおける昨今の移民研究、特に住環境を含めた街区の研究はHLM（Habitation à loyer modéré；低家賃住宅）で、今日では行われている政策や地区としてはZEP（Zone d'education prioritaire；優先教育地区）などが盛んである。だが、現代フランスにおける住居政策として挙げられるAdoma、その前身となったSONACOTRA(Société nationale de construction de logements pour les travailleurs)、さらにその前身であったSONACOTRAL(Société nationale de construction de logements

1　L'OBS, 09 février 2016 , « *Calais, Paris... Les bidonvilles n'ont jamais disparu. Leur éradication est un mythe* »

デザインというシステムは依然として重要であるということだ。

アルマーニが革命的なデザインしたのは衣服のみならず、ファッション業界での経営スタイルでもあった。

1次資料

・トマス・ゲインズバラ「朝の散歩」1785年、The National Gallery, London
・ジョルジュ・スーラ「グランド・ジャット島の日曜日の午後」1884年、The Art institute of Chicago
・ジャン=フランソワ・ド・トロワ「愛の宣言」1731年、Schloß Charlottenburg, Berlin
・オスカー・ワイルドとアルフレッド・ダグラス卿、1894年、National Portrait Gallery
・ジョヴァンニ・ボルディーニ「ロベール・ド・モンテスキュー伯爵」1897年、Musée dO'say, Paris
・オリンピックでメダルを獲得した米国陸上選手たち、1908年、National Portrait Gallery Her Majesty The Queen
・Giorgio Armani のウール地スーツ [722810]
・Armani Collezioni のウール地スーツ [2F54UH]
・Armani Collezioni のヴェルベット地のジャケット [1F66TO]
・Emporio Armani のヴェルベット地のジャケット [51G400]
・Tom Ford のウール地のスーツ [31CL44]

2次資料

・ハーディ・エイミス、森秀樹訳『ハーディ・エイミスのイギリスの紳士服』(大修館書店、1997年)
・ロラン・バルト、佐藤信夫訳『モードの体系—その言語表現による記号学的分析—』(みすず書房、1972年)
・—、花輪光訳『記号学の冒険』(みすず書房、1988年)
・Carr, E., H., *What Is History?*, New York, 1964
・Cawthorne, N., *The New Look*, The Wellfleet Press, New Jersey, 1996
・柏木博『ファッションの 20 世紀』(日本放送出版会、1998年)
・サルヴァトーレ・フェラガモ、堀江瑠璃子訳『夢の靴職人』(文芸春秋、1996年)
・ジョアン・フィルケンシュタイン、成実弘至訳『ファッションの文化社会学』(せりか書房、1998年)
・畑埜佐武郎監修、出石尚三著『スーツの百科事典』(万来舎、2010年)
・アン・ホランダー、中野香織訳『性とスーツ—現代衣服が形づくられるまで—』(白水社、1997年)
・深井晃子監修『[カラー版] 世界服飾史』(美術出版社、1998年)
・レナータ・モルホ『ジョルジオ・アルマーニ 帝王の美学』(日本経済新聞社、2007年)
・成実弘至『新装版 20世紀ファッションの文化史—時代をつくった 10 人』(河出書房、2016年)
・落合正勝『ファッションは政治である』(はまの出版、1999年)
・ブリュノ・デュ・ロゼル、西村愛子訳『20世紀のモード史』(平凡社、1995年)
・ダナ・トーマス、実川元子訳『堕落する高級ブランド』(講談社、2009年)
・WWD, "Giorgio Armani Restructures Brands, Rethinks Distribution" , the 27th of February, 2017

定せず、ディフュージョン版や若年層を想定したレーベルにまで適用した。アルマーニ・デザインそのものを価格や年齢に関わらず経験できるようにしたところがアルマーニのブランド・ビジネス・モデルである。

5．結論

衣服は移り変わりの激しいものであるという印象がある。確かに昨今では年２回パリ、ミラノ、ロンドン、ニューヨークで開かれるコレクションが発表され、各メディアがそれを報ずる。興味がなくとも、必ずと言っても問題ないほどにテレビでレポートされるため、目にせざるを得ない。単純計算すれば、年２回４か所でファッションの変化を見せつけられれば、ブランドの数の８倍のパターンが存在することになる。しかし衣服を歴史的に見ると、確かに変化に富むものもあれば、それほど変わらないもの、むしろ変わること自体が問題なものまである。

このような変化のパターンを参照しながら考察すると、男性服における変化は意義深い。特にスーツ・スタイルでは19世紀には完成されていた。そしてロンドンのテイラーを中心に継承されてきた。それは、スーツという商品（＝モノ）の耐久性を維持し、消費者からの満足を得るためにも他に選択肢がないと思われる。

ジョルジョ・アルマーニはソフト・スーツを打ち出した。それは着心地を最大限に追究するためであったが、柔らかい生地を使い、芯地を排することは同時に耐久性を損なうものである。さらに非形成的な製法は一瞬目にしたときの印象に大きな変化を生み出すことは難しい。企業経営という点では、モノを売りにくいはずである。しかし逆にそれによって、どのようなデザインを試みようともアルマーニ・デザインである雰囲気を残しており、アルマーニのブランド化に成功したのではなかろうか。Emporio Armani レーベルに関するアルマーニ自身の言葉として「“偉大なデザイナー”が一般の人々のために」というものを挙げたが、実際には、それは彼の名前を使ったというだけではなく彼の作る衣服のラインが受け継がれているという意味になる。ソフト・スーツを世に問うた意義は、結果的に人々が楽に感じる衣服を提供しただけでなく、ラルフ・ローレンのような歴史や郷愁を参照したような方法ではなく、一貫したスタイルによってブランドの神格化にも成功した。

また、アルマーニはブランドをデザインしたデザイナーでもある。これまでのデザイナーは自身の最高級ラインの他にはライセンスによってヴァリエーションを創出してきた。これらのブランドで得られたものは、最高級ラインの廉価版というだけであった。しかしアルマーニの場合は Armani Collezioni というディフュージョン版だけでなく、年齢層に分け、デザインを変えている。2017年２月にアルマーニはブランド・デザインを改変し、Armani Collezioni および Armani Jeans を止め、Giorgio Armani と Emporio Armani、Armani Exchange の３レーベルにすると発表した（WWD、2017）。レーベルが多角化したことで、各々の役割が不明確になってきたことを理由として挙げている[12]が、Emporio Armani はそのまま継続されるという点で、やはり彼の築いた年齢層によるブランド・

12　確かに彼の言うことにも一理あると思われるが、実際のところはそもそも小売店での利益率や、来店されたとしても以前とは異なる店舗内での人の流れがあると思われる。トーマス（2009）は「今日では、高級ブランド店でのショッピング」では「店内には服が数点しかなく」販売員は「10分、ときには20分も客を待たせることだって珍しくない」（P.5）と指摘しているが、昨今のデパートでは、客は各ブランドのショップを流れるように眺め見るようになり、時間をかけていない。また、インターネットで商品の目星をつけてショップを訪れるようになったことも一因している。つまり、ブランドが多岐化したことによって相対的にアルマーニ・ブランドのショップ内滞在時間が減少し、販売戦略に影響していることが最大の原因ではないかと思われる。

後者は10万円弱[10]であった。それぞれのデータは表３の通りである。両者は肩幅は同じであったが、着丈とウェストの絞った部分の幅が異なる。Emporio Armani の方が着丈が短く、腰回りの絞りも大きい。着丈が74.5㎝というのは一般的に言っても短めで、腰回りの絞り方と相まってスポーティな印象がある。78㎝の着丈は一般的であるため、落ち着いた感じになる。詳細な検証のためにはボタンの位置や襟の幅など様々なデータを採る必要があるが、これだけのデータでも Emporio Armani が意識している客層が比較的若年層で、販売価格からしても同様の結果が得られる[11]。

アルマーニがデザインしたのはアルマーニ・ブランドによる階層的なブランド・レーベルである。アルマーニ自身が述べていたように、まずは「アルマーニ・ブランド」の確立は必要だった。ラグジュアリーファッションを扱う“偉大なデザイナー”によるデザインというお墨付きを与えられた上で、価格を抑え、デザインも若年層をターゲットに据えたサブ・ブランド群のシステムを構築したのだ。そして、Armani Junior、Emporio Armani、Giorgio Armani という流れは、人の成長と合致する。換言すれば、幼少期からはもちろんのこと大人になってでも、アルマーニ・デザインから毎日の衣服を選ぶことができるのだ。さらに言えば、Armani Jeans でデニムを含む日常的なカジュアル・スタイル。Armani Exchange で日常生活を豊かにするような雑貨や小物がある。つまり、成長とともに日々の生活までもがアルマーニのデザインに囲まれることができる。

4.3. アルマーニが示すブランド・ビジネス・モデル

バルト（1972）は「欲望を起こさせるものは対象（物）ではなく名前であり、人に物を売るのは夢ではなく意味のしわざなのだ」（P.9）とする構造主義的分析はここにおいて改めて確認される。ラルフ・ローレンが内包した「イギリス風」への郷愁は過去に対する「夢」ではなく、そこから人々が感じる「意味」である。現在の生活の中では得られない漠然とした不満は過去との相違から生ずる、もしくは過去にはなかった悩みであるという前提から、「イギリス」を求めるようになる。バルト（1988）の「広告は、すべて一つのメッセージである。事実そこには、発信源、つまり売り出され（ほめちぎられ）た製品の発売元と、受信者、つまり一般大衆と、伝達手段、つまりまさしく広告媒体と呼ばれるもの、が含まれる」（P.69）という指摘もまた有効である。クリスチャン・ディール以降は映画産業との結びつき、ラルフ・ローレンは過去への郷愁をデザインとして落とし込み、商品に詰め込んだ。アルマーニは売り出すきっかけとしてリチャード・ギアを媒体とし、つまりは着心地という元来のアルマーニの特徴ではなく、スーツを解体・解剖しソフト・スーツとして再構築した結果として生じたゆったり感や落ち着き、若干香る反社会性からくる魅力を流布したが、それを単に最高級ラインに限

10　詳述しようとすればマーケティング論などで別の稿を用意すべきだが、一般に価格設定の上で「10万円の壁」というものがあると言われている。例えば「同じ容量の冷蔵庫」を想定した場合、10万円を超えるか否かで客層や販売数が変わる。つまり商品の企画段階で、換言すればデザインや使用する部品、組み立てなどにおいて10万円を下回るように価格設定できるような商品を打ち出すか、これらにこだわってでも10万円を超える商品を出すかという選択を企業はする。この点で Emporio Armani のジャケットが10万円を下回っていたというのは興味深い。

11　年齢層による展開は他にも例がある。2015年にライセンス契約は終了しているが、バーバリーのライセンス版であったブルーレーベルは元々18歳から25歳女性を、ブラックレーベルは25歳から35歳男性をターゲットとしていた。2000年頃からブルーレーベルでは2012年２月まで、ブラックレーベルでは2013年６月まで、それぞれ男性用・女性用を展開していた。しかし2013年には終了していることから、それほど成功したとは思われない。原因はブラックレーベル＝男性、ブルーレーベル＝女性というイメージが強く、年齢層による相違というイメージもなく、また広まらなかったためと考えられる。

クの「逃亡者」、同年ロビン・ウィリアムズの「キャデラック・マン」などがある。役どころはジゴロや受刑者、凶悪犯といった社会的には望ましいと言えないものではあるが、それはアルマーニのスーツがこうした反社会的な人たちのイメージに合うものであるというよりはむしろ、スーツ自体を解体し再構築したがために感じられる一種の「遊び」の要素により、そこから生じる魅力があるためである。

もう1つはアルマーニ・ブランド・イメージの拡大的展開である。現在、ジョルジョ・アルマーニには服飾部門に限ればGiorgio Armani（いわゆる黒ラベル）、Armani Collezioni（白ラベル、旧Giorgio Armani Le Collezioni、1979年～）、Emporio Armani（1981年～）、Armani Junior（1979年～）、Armani Exchange（1991年～）、Armani Jeans（1981年～）という展開をしている。Armani Jeansはその名の通りデニム関連を中心としたレーベルで、Armani Exchangeは衣服のみならず様々なグッズを展開しているが、アルマーニの成長、つまりはビジネス・モデルとしてはEmporio Armaniの存在は大きく、このレーベルを設立したことは、その後他のブランドが展開するモデルの範となっている。モルホ（2007）はアルマーニの言葉として以下のものを紹介している。

> デニム生地を使ったメンズコレクションの評判を試そうと思ってね。≪エンポリオ アルマーニ≫と名づけ、購買力があまりなくカジュアルなスタイルの若い層をメインターゲットに絞った。僕が自分の手で、ショーウィンドウをデコレーションしたんだ。道行く人がウィンドウ越しに、僕の作品を褒めてくれたよ。何よりもまず、ラグジュアリーファッションを扱う“偉大なデザイナー”が、一般の人々のために仕事を始めたことに驚いたんだ。コレクションのアイテムはどれも、アルマーニ・スタイルを貫きつつも価格を低く抑えた。その後、マーケティングの専門家の反対を押し切ってコレクションを拡大し、レディースも手がけるようになった。百貨店の主力商品を買うような層をターゲットにした、新しいラインをつくったんだ。（PP.126-127）

彼の言葉から明らかなように、Emporio Armaniが想定している客層は、購買力と関連しているが、若年層である。Emporio Armaniは、Giorgio Armani Le CollezioniからArmani Collezioniに名称が変更されてもGiorgio Armaniの単なるディフュージョン・ヴァージョンであるレーベルとは一線を画す。Giorgio ArmaniとArmani Collezioniは、前者にはウールをはじめ、シルクなどの高級素材を使った、仕立てにも意匠を凝らしたものがあるのに対し、後者はウールを主体に化学繊維のものもある。価格層も日本円で前者がスーツで50万円以上であるのに対し、後者は20～30万円が主な価格帯である。だが双方とも、人によっては目に入った瞬間に抱く印象に大きな違いはない可能性もあるほどに、デザイン上の相違は少ない。しかしEmporio Armaniのジャケットには遊び心が含まれる。手元にある2着のジャケットは如実に相違を表している。2着ともほぼ同じシーズンに購入したもので、双方ともヴェルベット地のジャケットだが、1着はArmani Collezioniでもう1着はEmporio Armaniのものである。価格は前者が15万円弱であったのに対し、

表3 ジャケットの採寸データ（平置き採寸）

	Armani Collezioni	Emporio Armani
ボタン数	2個	1個
肩幅	40 cm	40 cm
着丈	78 cm	74.5 cm
腰幅	45 cm	43.5 cm

出典：筆者作成

過去からの伝統や、時代の有力者のイメージをブランド化しているものである。ラルフ・ローレンの衣服を貫くイメージは柏木（1998）によると「イギリス風」である（P.115）。イギリスはアメリカのかつての宗主国であり、それゆえに現代のアメリカには実存しないはずのイメージである。高度成長期にアメリカでホーム・ドラマが大量に生産されたが、それは郊外の戸建て住宅での生活で、しばしば1920年代アメリカ文学の「失われた世代」で懐古的ともいうべきヴィクトリア朝的アメリカの価値観が描かれたことからも、そこには郷愁を誘うと同時に、アメリカの根本的なアイデンティティが存在している。しかしイギリスそのもののスタイルではなく、アメリカ人がイメージする過去のイギリスである。そこには過去として確定している、確固たる価値観があり、消費社会という流動性とは一線を画すものとなっている。彼はネクタイの販売からファッションでのキャリアをスタートさせているが、その名前は「ポロ」であった。言うまでもなく、古いイギリスの富裕層が興じたスポーツの名前である。これらのことから、ラルフ・ローレンは変化の激しい消費社会において、過去の伝統を「イメージ」と化し、ある意味での神格化を図り、それをブランドと結び付けている。

4.2. アルマーニによるブランド・デザイン

クリスチャン・ティオールの死はブランド性が重要であることを後世に残し、戦後復興の中マーケットとしてのアメリカの重要性を示し、ブルックス・ブラザーズを経たラルフ・ローレンがブランドにおける特定のイメージによってブランドをブランドたらしめるシステムを構築した。では、ジョルジョ・アルマーニは何を提示しているのか。

一言で表せば、アルマーニはイメージによるブランド戦略の幅を広げたということになる。1つは映画との提携である。フィルケンシュタイン（1998）は映画が流行を広めるため、映画産業に用いられたファッションは流行すること、それがハリウッド映画の広告展開とともに確立されたこと、映画がブランド品と消費を促すような生活様式を喧伝するだけでなく、スターと特定のファッションを結び付けてそのスタイルを流行させることを指摘した。実際、ハリウッドとデザイナーやブランドとの関係の構築は決して新しいものではない。サルヴァトーレ・フェラガモはビジネス展開の機会としてハリウッドに注目し、実際にアメリカでの足場を築き、成功に導いた（フェラガモ（1996）参照）。ユベール・ジバンシーとハリウッド女優オードリー・ヘップバーンとの関係も有名である。ただし、彼らのケースは相手が女優であることと、彼女らと個人的なつながりを得て、広告塔としてメディアに露出されることに限られている。アルマーニの場合は、リチャード・ギア主演の映画「アメリカン・ジゴロ」における、彼の衣装デザインである。アルマーニの名はこの映画がゆえに、世界的に有名になった。落合（1999）はイタリアのファッション業界が「アメリカン・ジゴロ」に対する偉大な評価として、「メンズファッションを改革した映画として、もしあの映画にアルマーニが採用されなかったら、ソフトライン[9]はトレンドとして登場はしただろうが、これほど長続きはしなかったはずである」（PP.161-163）と言われていることを指摘していることからも明らかなように、「アメリカン・ジゴロ」によってアルマーニの名が世界的に広まっただけでなく、男性服が特定の映画と結びつくことによって展開されるという道を示した。その後、アルマーニの衣装が用いられたのは1982年エディ・マーフィー主演「48時間」、1987年ケヴィン・コストナーの「アンタッチャブル」、1990年ミッキー・ロー

9　本来は「ソフト・スーツ」ではなく「ソフトライン」である。前者は日本のブランドが付けた名前である。本研究においては日本で一般的に広まっている「ソフトスーツ」という言葉を採用した。

の布地を用いたコレクションであり、懐古的ともいえるが、ヨーロッパが豊かであった時代の、いうなれば時代錯誤なものであった。このコレクションに対し「ハーパースバザー」誌編集長カーメル・スノーのディオールに送った言葉が、Cawthorne（1996）は「Your dresses have such a new look.」（P.109）であったと述べているが、そこから「ニュールック」と呼ばれている。彼のコレクションに対しては経済的な観点、フェミニズムの観点などから批判が相次いだが、フランスもさることながらアメリカのファッション業界からは歓迎ムードであった。こうした彼のデザインについては成実（2016）がリゾート地の実業家で生まれ育ったことを理由として挙げている（P.149）。戦前の裕福な家庭での生活が彼の脳裏にはあり、それゆえに1947年の彼のコレクションは富裕層のためのオートクチュールを想定していた。しかし、結果的にはナチス・ドイツ占領下にあって衰退していたパリのファッション業界を復興し、戦後の大量消費社会にファッションを位置付けることに成功した。彼はとりわけアメリカ市場の重要性を認識し、1947年９月にニーマン・マーカス賞授与式のためニューヨークに招待されたが、アメリカでの滞在期間を延長して各都市を回り、アメリカの都市や人々を観察した。アメリカではすでにニュールックのコピー商品が大量に出回っていたのである。

ディオールの名が広まると、ディオール社はストッキングや下着類、ハンドバッグ、手袋、ネクタイ、ジュエリーなどの商品でライセンス契約を結び始め、87か国で展開され、ディオール関連会社10社にロイヤリティが入った。当時多くのデザイナーやメゾンはライセンス契約がイメージの損失につながるなどと懸念していたため消極的であった。しかしディオールがブランドビジネスによって経済効果が得たことを見て、他のデザイナーもそれに続いた。ライセンス契約自体は新しい発想ではなかったが、ディオールは多角的な展開をし、成功した最初のデザイナーであった。また、コピーについても彼は独自の対応をした。例えばシャネルはコピーに対して寛容であったが、ディオールはコピーを嫌悪していた。簡単な複製と安価なコピー商品を許せなかった彼は、自分が正当なコピーを作らせた。ディオール社はブランドのイメージを損なうことなく、デザインの使用料を徴収するというシステムを構築したのである。結果としてディオールにはオートクチュール、ディオールブランドの既製服、実物のディオールをモデルにした既製服という階層化されたラインが出来上がった。このモデルが他のデザイナーにも伝播し、かつては富裕層を対象としていたパリのファッション業界は大衆消費社会化していく世界で購買層を広げていった。貧富の差がなくなったわけではなかったが、幅広い人々が（ハイ）ファッションを享受するようになったのである。

クリスチャン・ディオールは1957年に亡くなる。デザイナー本人がこの世を去ったとしても、ブランドは残る。その後のブランドの展開可能性こそ、今日に深い影響を与えている。というのも、オートクチュールではごく限られた顧客のためのみにデザインされていたが、高級既製服という考え方は「ディオールブランド」があってはじめて成立するものであり、デザイナー本人が亡くなっても存続していけるようなものでなければならない。その後今日までの道のりを考えれば、当時にはブランドが確立していたとして問題ない。

ブランド・イメージを重視した展開をしているのがラルフ・ローレン（1939年～、ブランドは1967年～）である。1967年にネクタイ店として創業したラルフ・ローレンの『トラッド』スタイルは、イギリスの伝統を意識したアメリカ的なもので、彼が自身のブランドを立ち上げる前にセールスをしていたブルックス・ブラザーズもトラッドのブランドである。ブルックス・ブラザーズの創業は1818年で、エイブラハム・リンカーン（1809年～ 1865年）やＦ・スコット・フィッツジェラルド（1896年～ 1940年）、ジョン・Ｆ・ケネディ（1917年～ 1963年）も顧客であったと言われている。

また、ジョルジョ・アルマーニのデザイナーとしてのキャリアも興味深い。多くのデザイナーがレディース・コレクションからスタートしているのに対し、アルマーニはメンズからスタートしている。その例は枚挙にいとまがないが、例えばアルマーニも含まれる、かつて3Gと呼ばれたデザイナーたち、すなわちジャンニ・ヴェルサーチ、ジャン・フランコ・フェレはレディースからである。前述したように、女性服の方が変化に富み、新たなデザインを生み出しやすい。この意味でも男性服のデザインは比較的容易ではない。そのメンズ・コレクションの発表からアルマーニは始めているのである。それには1970年代中頃の、彼がデザイナーとして歩み始めた時代、そして反体制運動やオイル・ショックという社会情勢が深く絡んでいた。1969年～75年、イタリアでは明らかに政治的思想に基づいた武力闘争が4,384件起こった。イタリアにある94県のうち、こうした騒乱の85%が6県に集中しており、ミラノやトリノ、ローマが特にひどかった。緊迫した社会情勢の中、さらにオイル・ショックが起こったのである。人々はファッションどころではなくなっていた。さらにフェミニズムの時代でもあった。革命とフェミニズム。その融合により、社会的変革のためにファッション、特に女性らしい服装は格好の標的となった。アルマーニが最初の発表をしたのが1975年7月の76年春夏コレクションである。モルホ（2007）はこのショーの中で「初めてデザインしたレディース物をいくぶん控えめに数点混ぜていた」（P.89）と述べている。メンズ・コレクションでありながら、女性モデルも登場しており、そこでの女性服は「働く女性を意識した、既存の構造を解体したブレザーに、メンズライクなラインの服」（同書、P.89）であり、1976年3月の秋冬コレクションへの布石となっていた。このレディース・コレクションでは、ジャケットを着用した女性と共に、鮮やかな色合いのパイル地スーツをまとった男性が登場している。つまり、女性服を男性服に近づけるとともに、男性服を女性服へと近接させたのだ。この発想はやはり、1970年代中頃のイタリア社会情勢が少なからず影響していると思われ、このユニセックスなジャケットのシルエットがアルマーニの特徴である。

アルマーニのジャケットはシルエットが他のブランドと比べると安定している。ソフトな生地で仕上げた非構築的な肩のラインをしたソフトなものである。例えば肩パッドを、その量を変えて入れれば肩のラインを柔軟に変え、新たなコレクションとして次々と発表することが可能になる。肩が上がればボタンの位置も上がり、襟の幅は狭くなる。これらによって前シーズンとの差異を提示し、続々と新たなシルエットを発表し続けることができる。アルマーニによる革命ともいうべき「ソフト・スーツ」は、ともすれば存続するブランドであるための戦略としては不適切なように思える。つまり、アルマーニがデザインしたものは他にもある。次節ではこの点を指摘する。

4．ジョルジオ・アルマーニがデザインしたもの

4.1．クリスチャン・ディオールの「ニュールック」とその影響

1947年2月12日。未だ戦後復興の途にあったヨーロッパでは物資が深刻なレベルで不足しており、農作物の不作による飢餓も懸念されていた。戦時中から続いていた先の見えない困窮の生活。ファッションも戦時服の面影が人々に重くのしかかっていた。そのような時期に行われた彼のコレクションのテーマは「カローラ・ライン」。そして象徴した服装は「バースーツ」と呼ばれたもので、クリーム色のシルクのテーラード・ジャケット、黒のウールのロングスカート。スカートについて若干の付記をするならば、コルセットで細く絞められたウェストからプリーツをたっぷりととったためにふわりと広がったシルエット。つまり、機能的で合理的な衣服からは程遠く、贅沢な素材使いや必要以上

ズの「慰めの報酬」以降[6]、ダニエル・クレイグの衣装をデザインしている。ジェームズ・ボンドは初代ショーン・コネリーの仕立てをしたテイラー「アンソニー・シンクレア」をはじめ、4代目ティモシー・ダルトンに至るまでサヴィル・ロウのテイラーがスーツを仕立ててきた[7]。トム・フォードのスーツにはモードの雰囲気や独特の色気[8]を否定しきれはしないが、サヴィル・ロウに目は向いている。1つは右記したように、ジェームズ・ボンドのスーツはサヴィル・ロウのものが長く用いられ、その範疇のものが選ばれてきた。2点目は、彼はコレクションの発表を行わない。サヴィル・ロウのテイラーはコレクションを発表することはなく、また、換言すれば、流行に合わせてスタイルを変更するつもりはないということである。これらのことから、サヴィル・ロウのスーツの代用としてのトム・フォードとアルマーニのスーツを比較する。時期、特に季節の相違によって生地の厚さを単純に比較することは意味をなさないため、どのように芯地を使用しているかをアルマーニのジャケットとトム・フォードのジャケットとで試みる。アルマーニについては Giorgio Armani Classico ライン2つボタンでウールのスーツ、Armani Collezioni はヴェルベット地の2つボタンジャケット、Emporio Armani のヴェルベット地の1つボタンジャケットを見た。トム・フォードは2つボタンでウールのスーツである。肩はアルマーニのジャケットでは3つとも肩から袖へ自然と流れるスタイルで、3つともほぼ同じラインを描く。計測が難しかったため感触でしかないが、肩パッドの厚さはそれほど厚くはなく、3つともほぼ同じ程度と思われる。それに対しトム・フォードのジャケットにはアルマーニのものに比して厚めの肩パッドが入っており、コンケイブしている。両者を比較すれば、トム・フォードのジャケットは明らかにデザイン性が高い。アルマーニのジャケットはどのラインでも芯地を使用していないと思われる。ボタンホールからどれほど外側に向かっても、厚さの違いがない。それに対してトム・フォードのものはフラップ・ポケットから下5㎝、ボタンから外側2㎝ほどのところで1㎜程度厚くなり、第1ボタンから上6㎝のところで更に1㎜程度厚くなる。つまり、身頃全体を形成すべく芯地が入れられており、胸の厚さを出すような芯地の入れられ方をしている。結果、アルマーニのジャケットは着用する人に合うようにしなやかであるが、トム・フォードのジャケットはジャケットに人がある程度矯正される。そして胸板が芯地で更に追加されるため、グラマラスな印象になる。従来のように芯地を入れる効果は、着用した人の姿を重視すれば大きいが、着心地はソフト・スーツにある。

男性服は19世紀以降、女性服と比して変化には乏しかった。変化という変数において不変の象限に位置する男性服において、衣服を構築しデザインするというそれまでの伝統・常識を覆し、人が着ていて楽なスーツを世に打ち出したという意味においてアルマーニがデザインした「ソフト・スーツ」は非常に重要である。

---

6 「カジノ・ロワイヤル」ではブリオーニであり、映画でもカジノへ向かうべく着替えるディナー・ジャケットはブリオーニのガーメント・ケースに包まれていた。

7 それゆえに5代目ピアース・ブロスナンがイタリアの「ブリオーニ」のスーツを纏うようになったとき、イギリスでは「ジェームズ・ボンドがイギリス人ではなくイタリア人になってしまった」と嘆く声も聴かれた。この変更はテーラーから高級仕立服ブランドへの転向という意味もあったが、ブリオーニはイギリスの伝統的な仕立てを前提にイタリア的解釈を施したものと言える。手元にあるブリオーニの3つボタンスーツのジャケットでみるならば、第1ボタンの上2センチほどのところから厚めの芯地が用いられ、肩パッドも過度ではないがしっかりしている。この点ではイギリスのテーラー的ではあるが、肩のラインはコンケイブになっておらず、自然と袖へ流れている。

8 サヴィル・ロウのテーラーも全くスタイルを変えないわけでもない。サー・ハーディ・エイミスもその著の中で変化の必要性は述べている。詳しくはエイミス（1997）を参照。

ギャバジン地で、肩幅と襟幅は広く、ウェストは絞っている。2つボタンの下のボタンをすべてのスーツで外しており、この頃に今日のような留め方が定着し始めた。1930年代後半になると、アメリカでは「ブリティッシュ・ブレイド・スーツ」、すなわち肩や襟、トラウザーズをできる限り幅広にとることで男らしさを醸し出すようなスタイルになった。1940年代は世界大戦であったが、この時代も戦火の拡大と合わせるかのごとく、ゆったりとしたシルエットであった。その反動か、1950年代に入ると「エスクァイア」は「ミスターTルック」というテーマを発表している。これはtall、thin、trimの頭文字を集めたものだが、スーツをより長く、細身ですっきりとしたものへという提唱であった。1960年代、ビートルズが席巻する中、アメリカで「ロンドン・ライン」と呼ばれるスタイルが出てきた。イギリスの仕立屋街サヴィル・ロウの雰囲気を踏まえたもので、はっきりとウェストを絞っている。つまり、肩幅を取り、裾は緩やかに広がるフレアー・スタイルになる。パリではロンドンのスタイル、すなわち絞ったウェスト、にフレアーのトラウザーズというスタイルがもてはやされていた。肩は付け根がより盛り上がったコンケイプになっていた。ロンドンではピエール・カルダンが発表した「シリンダー・ライン」が注目されていた。その名の通り、シリンダーのように直線的で、何よりも細さを極限まで追求したスタイルであった。

これらのスーツは着心地よりはデザイン性や、そもそもテイラーの伝統を重視したものである。胸にドレープを描くよう仕立てるためには芯地が必要となるが、その分着心地は悪くなる。肩を構築的にするには肩パッドが欠かせないが、やはり着心地に影響する。要は細すぎるものであれ、幅を持ったものであれ、安定的なシルエットを確保するためには芯地を入れる必要があり、それは着心地を犠牲にしてのことである。そこでアルマーニが作ったのが「ソフト・スーツ」である。彼のファッション業界でのキャリアは仕立屋ではなく、「ラ・リナシェンテ」デパートの紳士服バイヤーからスタートした。ゆえに彼にはテイラーとしての決まりよりは、顧客の声の方が近かった。彼は当時を振り返り、服に金を惜しまない裕福な人たちを満足させることの難しさ、それが見た目の類似性であり、着心地の悪さからくるものであったことを述べていた（モルホ（2007）P.92）が、その経験から、芯地を排することを重視する発想を得た。

その実現には少なくとも2点を指摘しておかなければならない。1つは生地の選択である。彼は甘撚り糸を選んだ。普通スーツを仕立てる際に選ぶ生地は張りやコシがある、適度に強く撚られた生地を用いる。甘撚り糸を用いると生地が破れやすくなり、生地と生地の縫い目が避けやすくなってしまうため、あまり用いられてこなかった。しかし彼はソフトに仕上げることに注力した選択をした。2つは、仕上げ段階でのスティーミングをしないことである。高温の蒸気を当てることで生地を安定させる工程で、これを踏まえると生地の均一さが増し、仕立てる際、扱いやすくなるのだが、生地の風合いを損なう。アルマーニは生地を柔らかくするべく、スティーミングを生地に施さない。極限までにソフトさを追求した生地でスーツを仕立てたのである。

伝統的なスーツとアルマーニのものとを正確に比較するためには前者はロンドンの仕立屋街「サヴィル・ロウ[5]」のテイラーによるものであるべきだが、手元にないため比較的近いトム・フォードのスーツで比較する。トム・フォードはアメリカ人で、凋落の中にあったグッチをV字回復させ、ラグジュアリー・ブランドへと復活させたデザイナーとして知られるが、昨今では映画「007」シリー

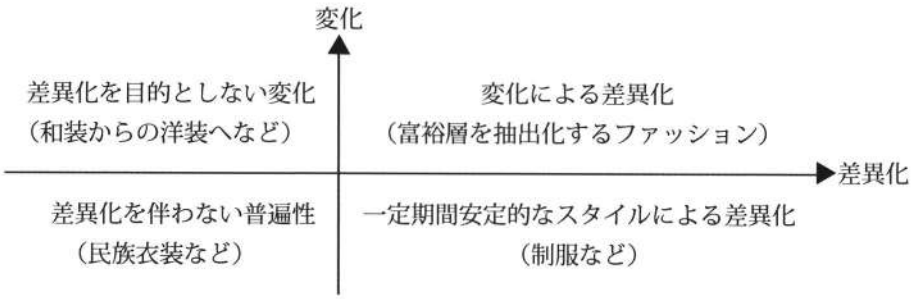
5　余談ではあるが、日本語の「背広」の語源については諸説あるが、私見としては音が「背広」に最も近いSavile Rowではないかと考えている。

で貴族階級が着用していたような贅をこらした衣服への選好が見られるようになる。それは、衣服の選択が完全に自由になったがゆえに生じた差異化の必要性からであった。

差異化は階層間の区別のためであったが、その結果現前化した差異は各階層内において同質的な装い—ある種のモード—が成立する。高級素材であるシルクや金、銀、宝石、毛皮は有史以来貴重な原材料であり、身に付けるものに豪華な装飾を施してもきた。単なる差異化だけであれば、豪華絢爛に装うだけで事足りるはずである。しかしそこには一定の閾値が存在し、無尽蔵なヴァリエーションが可能なわけではない。差異化だけでは説明できないこの部分は、社会階層内を更に細分化し、職種や趣味、同好会などの変数を加味しなければならない。同じ収入を想定し、20万円程度でスーツを購入する２者がいるとして、エルメネジルド・ゼニアを選ぶかアルマーニ・コレツィオーニを選ぶかでは年齢や職種などの基本属性が異なる。過度な単純化を恐れなければ、前者は企業の営業部、後者は内勤になる。アルマーニのスーツは楽である一方でデザインに遊びが入り、スーツ自体の個性が比較すれば際立つ。

民族の別によって同じような衣服を選ぶ傾向にあったり、価格によって差異化が図られ、同価格帯で見れば基本属性内では同じような衣服の選好があり、結果として同質的な選ばれ方がなされる。

図２　ファッションにおける４つの象限



出典：筆者作成

本章で論じてきた視点を理念型的に図示化すれば図２のようになる。このように整理すると、衣服が単なる防衛や防寒などの目的に限られない限り、おおよそこの４つの象限のどこかに分類されうる。これはつまり、現代の衣服の目的に差異化が大きな重要性が置かれており、さらに変化がどのように影響するかで考察しうることがわかる。

３．ジョルジョ・アルマーニの「ソフト・スーツ」

1970年代以前、スーツは構築的であった。しっかりとした形を作るため、固く厚めの芯地スーツに入れられていた。1930年度の「シアーズ・ローバック」のカタログには「ファッション・テーラード・スーツ」と紹介されており、「ラウンジ・スーツ」ではなくなっていることが明らかである。フランネル地で、シルエットは肩幅が広めでウェストの位置は標準的、直線的で太目のトラウザーズだが、２つボタンの２つともが留められている。３ピースの構成で、そのうちの１着は袖の付け根が盛り上がる「リフテッド・スリーヴ」になっている。1934年度の「シアーズ・ローバック」カタログでは

現下の我が国の状況は何人も異論なく未曾有の難局である。服装について各方面から種々の議論が行われるのは難局に処して服装風俗を改善せねばならぬとの意識が濃くなつた為である。

今日の国民生活は国家の悠久なる発展の中に自己の生活を見出し、自己の生活目的を国家目的に合一せしむる所に其意義を発見せねばならぬ。個人生活と国家目的とが相反するするやうなことがあつては真の国家の発展は望まれぬのである。衣服についていへば現下の衣服事情に即応した衣服生活が実現されねばならぬのである。…衣服、服装は国民生活の理念の表現である。臨戦態勢下の国民服装は、此の非常時局突破にふさわしいものたらしめねばならぬのである。

この中で注目すべきは、自己を犠牲にしながらも、個人の生活を国家の目的と合一させることで国家の発展が望めるとしたこと、そのためにも現状から抜け出せる服装を選択すること、さらにこうした過程を経て「国民」を創出（演出）しようとしたことであろう。

総力戦のもとで衣服に機能性・機能美および合理性が求められ、各国が国民服・標準服を制定し、国内において同質化が見られた。と同時に、主義主張・敵／味方を越えて国家間においても同じようなこと、同質化が起こっていた。

国家による政策の結果、同質的な衣服が作られ、人々が身に付けることになった例以外にも衣服が同質的になることはある。選択の自由が得られた結果、同じような衣服を選ぶことになるものである。1791年、フランス革命期に国民公会は「男女の服装に関する法令（Relatif aux Vétements des persones des deux sexes)」を出したが、そこでは次のように記されていた。

何人たりとも、男性市民および女性市民に対して特定の衣服を着用するよう強制することはできない。これに違反するものは被疑者として扱われ、公序良俗を乱すものとして訴追される。個々人はどのような衣服を着用し、それぞれの性で各々が良いと思う服装をしようとも自由である。

この法令から明らかとなるのは、フランス革命以前は服装の選択に自由がなく、強制されていたものであることである。それを国民公会は否定したのだが、結果として旧平民身分には自由が付与されることとなった一方で、貴族階級には差別化の手段が失われたことを意味していた。また、フランス革命によって無化された身分制度は19世紀の産業革命を経て新興ブルジョワ階層を生じさせ、貧富の差が階級では測れない時代となった。強固な国民国家体制が形成されていく中では、人は出自によって差別されることはなくなり、等しく「国家」と個々人との間に結ばれた「契約」により結ばれていく。このような時代背景と服装の自由化には高い親和性があり、形式的・法的には外見では階層上の差別化が不可能となった。

さらに「特定の衣服を着用する (se vétir d'une manière particuliere)」とあることから、革命以前には衣服のデザインも特定されていたことがわかり、この法令によってデザインの自由度が発生したこともうかがえる。デザインの硬直性は、新たな衣服の発注がその耐久性の低下にほぼ等しく、流動性は低かった。しかし、18 世紀末に衣服のデザイン性が生じ、また19世紀に入ると産業革命の波によって衣服は市場原理の中に埋め込まれることとなった。衣服は身分制度と密接な関係があったが、その身分制度がフランス革命によって、デザインの硬直性は産業革命によって廃された。

フランス革命後、国民公会が発布した服装に関する法令により、男女や階級による服装の固定はなくなり、人々は自由に選択できるようになった。しかし、新たな新興層となったブルジョワは旧制度

例も少なくない。

アルゼンチン南部のパタゴニア地方に住むテウェルチェ族はグアナコの皮で作った、ものによっては刺繍も施されたマントを羽織り、モカシンの靴を履く。ボリビアのケチュア族はポンチョをベルトで締めて着用する。帽子は耳に覆いのある尖ったものである。このような帽子はインカ帝国の彫像などでよく見られる。同じボリビアでもラ・パスに住むチョラの帽子は高さが非常にあるものになる。スカートはふくらはぎより上の丈で、ボレロを着てフリンジがついたショールを両肩からかける。彼らの帽子は縁が大きく、平らである。このあたりの地域、ケチュアの女性は、ケープ状のマントを羽織り、その下に長袖・膝丈のワンピースを着て、帽子は被らない。スカートを重ねて着るため裾の方は広がる。この周辺の男性は袖なしのヴェストを着用しているが、それはキリスト教の聖職者のスタイルに類似する。聖職者の服装に類似する他の例としてはリオ・グランデのカビーナ族で、長袖でゆったりした白のワンピースにベルトを締めて着用する。

例を挙げれば、それこそ民族数だけ出てくることになるが、羽織るものであってもマントであったりポンチョであったりする。帽子も形状やデザインは各々特徴的であり、被らない民族もいる。少なくとも明らかなことは、地区・地域はそれほど説明の要素としては強くはなく、多様な民族衣装が存在する所以は民族が多様であるからだと言えそうだ。近接した地域であっても羽織もののスタイルや帽子の形状、その有無は様々だからである。民族衣装は居住地域・地区によって決定されるものではなく、自らが属する民族によって決するものであり、義務などではないが、同一民族は同じような服装になっていく。欧米化している社会であっても、祭事などではこの傾向が表出することが多い。

また、名称は国家によって異なったが、第２次世界大戦中、日本だけでなく、イタリアやイギリス、アメリカ、ソヴィエトにおいて衣服の標準化が図られた。ここに挙げた国は当時、ファシズム、資本主義、社会主義であり、思想的には相互に相容れず、戦争状態たらしめた国々であった。こうした方向へ動いた原因は、第２次世界大戦が総力戦であったためである。

イギリスでは商務省がイギリス・ファッション・グループに対して戦時下の衣服デザインを要請し、1942年にロンドン・ファッション・デザイナー連盟が設立された。彼らがデザインしたのは一種のユニフォームのようなものであったが、「ユーティリティ・ガーメンツ」と名付けられ、実用的だが簡素なその衣服は1946年までは女性の中で一般化していた。また、アメリカにも輸出され、「ヴィクトリー・スーツ」と呼ばれた。

イタリアでは1933年にムッソリーニが「国立モード協会」を設立し、服飾に関するイタリア国内市場の掌握を計画した。さらにイタリアがあらゆる分野においてイタリア文化によって先導するというファシストの理念のもと、1929年、「イタリア・アカデミア」を設立し、マリネッティなど未来派の芸術家が会員に選出され、国民の公用服のデザインをした。バッラやヴォルト、タイアートなどが早期に美術的な実験として機能性と美の統合を目指した衣服をデザインしていたこともあって。芸術家と産業とが共同でイタリア・ファッションをデザインした。

日本では厚生省と商工省の嘱託を務めながら被服協会理事でもあったデザイナーの斉藤佳三が「婦人標準服の考案」を書いている。そこで斉藤は日本的な性格をもった衣服でありながら、活動的になるためにも衣服の無駄を省くことを提唱し、和服の袖を短くせよと主張した。標準服の基準を機能性に求め、それこそが合理的で、美にもつながるという立場である。また、厚生省生活課長の青木秀夫は『すまいといふく』1942 年 1 月号に「国民生活と衣服」というエッセイを掲載している。

に異を唱え、色やキュロット、素材などで男性が華美に装うことの重要性を自身の服装で主張したが、世に受け入れられなかった程であった。

簡素化とともに進んだのはカジュアル化である。以前のジャケットが必要としていた細いウェストを形成するためには技巧的な裁断と縫製を要していたが、1850年代に現れたラウンジ・スーツはウェストに裁断線がなく、ストレートなデザインであったが、時代の流れが簡素化にあったからこそ現れたものであったことは間違いない。

18世紀までの男性服は生地や装飾などで一定しない要素が大きかったが、19世紀に入るとイギリス趣味の影響で簡素化が進んだ。衣服はジャケットとヴェスト、トラウザーズで構成されており、この点では変化はおおよそ見られず、それは現代にも通ずるスタイルである。

2.2 差異化

ファッション上の差異化には、時系列で見た場合の差異化がある。前シーズンのものを「流行遅れ」とし、新たなトレンドを生じさせていることを想起すれば明らかである。これは、換言すれば前述した「変化」に相当する。しかし、同時的に見てもファッションには差異化を看取することができる。だが、こうした差異化のみでファッションを考察することはできない。差異化が図られる一方で、別の力学が機能する部分も持っている。

2.2.1. 差異化の象限

社会における差異化、すなわち、階級や階層を含む社会経済的な差異が生じたことによる各々の社会的役割やライフ・スタイルは、それぞれの立ち居振る舞い方へと帰結し、結果としてファッションにおける差異に転じた。また同時に、ファッション上の相違が制度化されもした。右記した制服であるが、制服自体は変化しないが社会の中には複数の制服が存在していることが一般的で、それらの間、例えば各学校の制服の存在というのは他校との差別化を可視的に図るものである。

ファッションにおける差異化といってまず想定されるのが富裕層か否かに関わる部分であろう。近代以前には服装を選ぶ自由はなかったが、人々が衣服の選択をするようになると、それは全くの自由を意味するのではなかったと気が付くことになった。確固たるものとして存在していた階級システムが崩壊したが、流通するモノは産業資本主義によって動かされ、各人が日常的かつ主体的に衣服を選べるようになったわけではなかった。やわらかな高級素材をたっぷりと使い、細緻にわたる手作業によって美しく仕立てられた衣服を誰もが纏えるわけではなく、結果的にそれぞれの社会階層に合わせた衣服が、それぞれの可処分所得帯に合わせて設定された価格で販売され、こうしたモノを人が選ぶためである。さらにモノを売り続けなければならない産業資本主義において、モノのリノヴェーション、換言すれば新たなモノを作り続けていかなければならないというある種の脅迫観念により以前のものを古いものと化し、新たなものを売っていく戦略がとられるため、贅を尽くした最新のモデルを身に付ける層が視覚的に発生する。これがファッションにおける差異化である。

2.2.2. 同質化の象限

それぞれの民族が伝統的に纏ってきた服装は文化の継承とともに受け継がれ続けるものもあれば、欧米化しているものもある。概して民族衣装として残り、多様であるのが南米である。南米はスペインやポルトガルの侵入により歴史的な転換点を経験しているが、伝統的なスタイルが堅持されていた

日本では欧米型のスーツが実現に至った。

フランス革命や明治維新といった例は極端なものにはなるが、急激かつ大幅に衣服が変わることがある。

2.1.2. 不変の象限

ファッションが移りゆくものであるという印象はあろうが、基本的にはあまり変化しないものもある。例えば警察官の制服が年に2回のコレクションで変わっていれば、一般人が警察官と認識する大きな判断基準を失うことになり、混乱をきたすであろう。

スーツ、英語の suit は suite を同じ語源を持つが、このことから「スーツ」とは「揃いの」という意味が根幹にある。男性服もわざわざ「揃い」と言わなければならないことには歴史的な流れがある。

今日では suit と呼ばれているが、それは19世紀初め、ラウンジ・スーツ（lounge suit）であった。「ラウンジ」が省略された結果「スーツ」のみが残ったのである。18世紀までは男性服も変化に富んでいたが、19世紀に入ると簡略化・簡素化の流れが旧世紀のトレンドを凌駕し、今日とほぼ同じようなスタイルが確立した。

着る物の構成としてジャケットとトラウザーズを想定するならば、定着の起源は 18 世紀の habit à la française に求めることができる。17 世紀のヴェルサイユではジュストコール[4]、ヴェスト、キュロット、クラヴァットの組み合わせが宮廷服として採用されていた。17 世紀はスタイルの変形が激しかったが、18 世紀を通して定着していく。18 世紀初めはジャケットの裾が腰の襞を基点に広がり、袖口にも幅広で長い折り返しのカフスであったが、全体的に少しずつ細身になっていった。18 世紀前半にはこれらの衣服に金やレース、刺繍などで装飾がなされていたが、後半になるとイギリス趣味が流行し、ジャケットから刺繍が廃され、ヴェストの丈も短くなるなど簡素化していった。フランス革命後にはキュロットから長ズボンになり、19 世紀以降のスタイルを準備した。

19世紀に入ってもイギリス趣味の流行は衰えず、イギリスのテイラーが男性服の流れを決定していた。装飾的な部分が追加されることはなく、むしろより簡素化や定型化が進んでいっていた。こうした流れを作り出したのは、その装いによってイギリス社交界を支配した、平民出身のジョージ・ブライアン・ブランメル（1778～1840）が創始者とされるダンディズムであった。ダンディズムによる装いとは①衣服が身体にぴったりと合っていること②控えめな装飾と地味な色であった。①は衣服に皺がなく、皮膚の一部であるかのように密着されていることを意味した。これを実現したのは、イギリスの裁断技術の進歩やテイラーたちの進歩であった。②については、例えば色は地味な青やグレー、クリーム色などを主体とした。衣服の色や装飾がシンプルになった分、ネクタイの結び方で個性を演出すべく他と競った。

かくして17世紀以降に定着し始めたジャケット、ヴェスト、キュロットという組み合わせは、18世紀および19世紀の2世紀をかけて簡素化し、1820年以降にはキュロットが昼間の衣服や宮廷服として扱われるようになり、長ズボンがキュロットに代わって定着するようになった。

19世紀後半はこの流れが踏襲され、特に色についてはジャケットが黒、ヴェストが黒もしくは白になり、より簡素化が進んだ。そのダンディズムで有名であったオスカー・ワイルドはこうした簡素化

4　細身で丈はキュロットが隠れるまでの長さがあり、両脇には襞が畳み込まれており、前開きの両側にはボタンが並び、袖に大きなカフスが付いたもの。

の形状はペティコートの重ね着によってなされていたため女性の活動は大きく制限されるようになった。一見不都合に感じるが、ロマン主義的女性像との高い親和性からこの流れは継続され、スカートの丈は地面に着くまでに至り、活動はより制限される方向に向かった。 1850年代後半、鯨の髭や針金などで輪状に形成された下着であるクリノリンが登場すると、容易に裾を広げることができるようになり、スカートは急激に広がった[2]。1860年代に入ると、スカートの前面が平たくなると同時に後側が広がるとともに長くなり、裾は引きずられるようになった。1870年代に入るとクリノリンに代わってバッスル[3]が登場する。バッスルは明らかに一般化した。日常的な光景を描写したジョルジュ・スーラの『グランド・ジャット島の日曜日の午後』で描かれた女性たちはバッスルによって作られたスカートのラインをしている。

19世紀中頃からアメリカやイギリスで女性の地位向上を求める運動が盛んになってきていた。1851年アメリカでブルーマー夫人(アメリア・ジェンクス・ブルーマー)自身が編集していた『Lily』誌面上で、女性がより衣服で束縛されたり歪曲されたりせず、活動的であるべく女性もトラウザーズを活用すべきだとして自ら実践した。その影響を受け、1881年にイギリスでレイショナル・ドレス協会が設立した。しかし1880年代以降のファッションを決定していたのは時代の風潮としての『ベル・エポック』であり、芸術分野、すなわちアール・ヌーヴォーで、曲線的な意匠を是とした潮流は豊満な胸、引き締められたウェスト、後方に張り出した腰のラインで完成されるS字シルエットへと向かった。1890年頃になるとバッスルは縮小し、ドレスの簡素化が見られるようになった。裾も細くなっていったが、それに反して袖は大きく膨れあがった。1895年頃に最も大きくなったが、その袖も1900年頃には廃れた。また、主にスポーツや旅行用としてテイラード・スーツの応用、つまりジャケットとシャツおよびスカートというスタイルも見られるようになった。

19世紀の女性服は、ウェストのラインや裾の長さ、袖の大きさ、コルセットやその後継およびそれらの有無において、変化に富んでいた。

衣服の大きな変化を経験した国は他にもある。日本である。明治維新後、欧米化が図られるようになり、和装から洋装へと、いわば革命的な勢いで変化することが迫られた。

そもそも布を身体に纏うためのものが衣服であるが、その覆い方には3種類ある。1つは1枚の布を巻きつけるスタイルである。巻きスカートやサリーなどがその例である。残る2つの方法は、複数の布を用いて縫い合わせ、服を作るという点では共通しているが、例えば胴回りに限って指摘するならば筒型か袋型かの相違である。筒型とは2枚の布を人の胴の形に合わせ、中を空洞になるように立体的に縫い合わせることで完成される。スーツはこの部類にはいる。袋型とは2枚の布を重ね合わせ、そのままの状態で淵を縫うことによって完成される。日本の着物はここに分類される。ハンガー状のものに掛けたとき、スーツのジャケットは空洞が形成されるが、和装の着物は2枚が重なり合わさり、平坦になる。

つまり、明治維新による「服装革命」は袋型から筒型への変更を意味しており、明治期の日本で問題となったのは、誰がスーツを仕立てるか、であった。当初衣服であるため、呉服屋が制作を試みたが失敗に終わっている。布を縫い合わせる方法として筒型になる縫製経験がなく、スーツのようにはならなかった。結局、当時複数の布を立体的に縫う技術を持っていたのは足袋職人で、彼らによって

2　その様子は、劇場で着席出来ない女性や、スカートの中が鳥カゴになっていると風刺される程だった。

3　詰め物もしくは枠状の様々な素材で作られた腰当てで、腰元から筒状にラインを形成している。イメージとしては太めの尻尾のようなもので、スカートの後側に膨らみが出来る。

在するはずである。ファッション史の書物は存在してはいる。だが、それらは過去に流行した服装の辞典的なものや結果として成立したファッションに関するものばかりで、変化の定式化やそこから見えてくるものを論じようとはしていない。言うなれば、歴史学の中でも定点的な考古学的論考である。そこで本研究において、まずは日々行われている被服という行為の連続として、ファッションの変遷を類型化する。すなわち、変化自体の大きさと変化の方向性の定式化を試みる。その上で特定の変化をどこに位置付けるべきかを考察する。具体的にジョルジョ・アルマーニが起こした変化を見ながら歴史学的な分析方法の１つの可能性を示す。衣服研究の方法として絵画や写真を参照することは以前から行われてきているが、本研究ではさらに実際の衣服を資料化する試みもする。これらを通して見えてくるのは現代社会の１つの大きな特徴である消費社会およびその変遷と、それに合わせざるを得ないビジネス経営論であり、社会に対する歴史学的考察かつ歴史に対する社会学的考察になる。

２．ファッションにおける４象限

ファッションにおける視点には①変化②差異化の２次元があり、それぞれの変数には相対的に度合いの高低がある。本章で具体的事例を示しつつ、これらの４象限を明らかにしたい。

2.1.　変化

今日のファッションには変化は必須要件となっている。変化が存在している、もしくは変化を生みだすことで、ファッションは産業として成立し、そのことによってファッションはファッションたらしめられている、とも言える。しかしその一方で、長期的には変化してはいるものの、短期的な変化はそれほど大きくない要素もある。

2.1.1.　変化の象限

ファッションにおける変化は、例えば19世紀末、特に1860年代以降に見られたコルセットの消滅がよく挙げられる。

19世紀に男性服ではイギリス趣味の影響で簡素化が進み、ダンディズムとカジュアル化の結果として今日のようなスーツ・スタイルが完成されつつあったが、相対的に大きな変化はなかった。それに対し女性のファッションはめまぐるしく変わっていった。

1820年代中頃には前世紀に高く設定されていたウェストの位置は下降し、標準的なところでウェストのラインが作られ、廃されていたコルセットが再び使われるようになった。ウェストが引き締められることでスカートの裾が広がり始めた。袖口も大きく広がり、その形状は様々であったが、共通してネックラインは下がり、デコルテが大きく広がったため、ケープやショールが多用されるようになった。結果的に出来上がったスタイルは1820年代から1840年代のロマン主義[1]の影響を明らかに受けており、ロマン主義演劇の主題として好まれていた15世紀～16世紀の宮廷内の服装はドレス、アクセサリー、ヘアスタイルに影響を与えていた。

19世紀中頃にはウェストのラインは更に低くなり、細さを増した。スカートの裾は広がったが、そ

1　幻想的で理想化された特に中世世界で、そこでの女性像はか弱い従順なもので、男性の愛と理想の対象化されていた。

ジョルジョ・アルマーニがデザインしたもの
― ファッション史に対する歴史学的考察の一試論 ―

青　木　輝　憲

0．はじめに

0.1　問題の所在

E. H. Carr（1964）は「歴史学が社会学的になればなるほど、また社会学が歴史学的になればなるほど、それは両者にとって好ましい」（P.84）と言った。昨今では「社会学」というタイトルの付いた書籍が非常に多いが、それらの多くは社会学、すなわちオーギュスト・コントを継承したエミール・デュルケムやマックス・ヴェーバーによる理論化、彼ら以来続く研究分析方法の確立やその試行錯誤といった学術的意味の「社会学」というよりはむしろ、「社会」の「学」、換言すれば社会について語るだけのものが氾濫しているように感じる。こうした流れからCarrの主張を実現することは難しいであろう。

社会があれば歴史があり、歴史には社会が不可欠である。では、社会学を歴史学化する方法、もしくは歴史学を社会学化する方法は存在するのだろうか。1つの答えは「社会史」であろう。しかし、社会史のようなマクロな視点からのアプローチではなく、アナール以降の歴史学を鑑みた上での社会学への接近を試みることは不可能だろうか。そのための試論として、衣服を本研究では採り上げる。衣服を纏わぬ人がいないとは言えないが、現代では多くの国・地域で衣服は実践されており、日常化しており、日々の生活の集積としての「歴史」と、個々人の生活の集積としての「社会」を考察する示唆が得られると考えるためである。

1．衣服に関する先行研究と本研究の位置付け・方法論

衣服に関する古典的研究は民族衣装についての文化人類学的なものである。例えばインドの民族衣装は現在でも着用されている。ヒンドゥーの代表的な民族衣装ドーティは男性の白い服であるが、一枚の布を巻きつけることで完成される。女性の民族衣装サリーは一枚の半透明な布を身体に重ねて巻きつけて着るものである。素材や染色、模様などによって個体差が生じるが、巻き方と合わせて地方やカーストでの相違を表す。インドにはこのような伝統的民族衣装があるが、帝国主義帝国時代のイギリスとの関係は無視できない。インド人の中にもイギリス的モードを身に付ける人たちが多くいるためである。この点についてデュ・ロゼル（1995）はイギリス側がインド人に対してイギリス的服装を強要したからではなく、インド人が自発的に取り入れられた結果だとし、特に若年上流層が19世紀末から20世紀初頭にかけて「盲目的に模倣」しようとしたためで、「伝統的なインドの民族衣装のなかに、イギリスのモードの特徴を持つ新しいモードが現れるようになった」述べている（P.59）。

ごく簡単な俯瞰ではあるが、衣服についての研究はこのような民族衣装の広がりや類型化、彼らの文化的な関係性などについてのものがほとんどである。これらの業績は文化人類学的で、その意義を否定するものではない。しかし、時代背景や服装の移り変わりを研究する以上、歴史学的な要素も存

hand to me as I got in the taxi.

The shame of history and aggression during the war aside, the Russian people I met were all nice and kind. I'm glad that I grew out of hate toward the former virtual enemy. I just feel sorry that I visited their land without knowing their language but grateful for their kindness.

In a video clip titled *Watashitachi-wa Karafuto-o Shiranai*, (We Do Not Know Anything about Karafuto), which was posted on the Internet, appeared a 91-year-old former Japanese resident Sasaki Toshio, who returned to the island for the first time in 70 years. He was shocked to see how much his homeland had changed. He even expressed anger when he found the school he attended was gone and now stood a military officer hall that was off limits to foreigners. Yet at the end of the video he stated what I think would be the perfect line to conclude my journey log.

> *I found nothing on this island I had been expecting to see. How thoroughly the Russians have changed my home. But the only solace to my sorrow is that these Russians call it their home and love it.*

References

Readers may find these books and video clips informative and entertaining.

- チェーホフ (2009)「サハリン島」原卓也訳　中央公論新社
- 地球の歩き方編集室「地球の歩き方 A32 シベリア＆シベリア鉄道とサハリン　2017-2018」
- 金田一京助 (1965)『「心の小道」をめぐって』 金田一京助全集 14 文芸 I (pp. 460-495) 三省堂
- 宮沢賢治 (2016)「銀河鉄道の夜」青空文庫
- mrrocketnews (2012)「サハリン (樺太) にある『樺太神社跡』に行ってみた」
  https://www.youtube.com/watch?v=xaqb_aS89MM
- 関野吉晴 (2006)「北方ルートサハリンの旅 (新グレートジャーニー日本人の来た道」小峰書店
- 吉村昭 (2011)「間宮林蔵」講談社文庫
- 稚内北星学園大学 (2016)「私たちは【樺太】を知らない」
  https://www.youtube.com/watch?v=2W2qr6zWDuA
- ウィキペディア「樺太」
  https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A8%BA%E5%A4%AA

figures who contributed to exploration of the island in the early 19th century before the map was drawn. Another interesting display was a stone border marker that used to stand on latitude 50 degrees north that separated North Karafuto, Soviet territory and South Karafuto Japanese territory. One side of the stone was engraved with Russian words and on the other side was Japanese.

Besides these two displays, there was a lot of stuff that looked interesting: stuffed specimens of Sakhalin bears or foxes, a model of an old hut inhabited by indigenous people on the island. This was another moment when I regretted that I did not know their language because all the information written in Russian was beyond my head.

There was another building left from the days of Japan; it was an old building of the Former Takushoku Bank's Toyohara Branch. It was a solid, gray stone building. There was no sign of dilapidation, even after the devastating war and the 72 years of Russian ruling. I just walked around the building to look for a trace of Japanese ownership, but there was nothing—no kanji characters or no chrysanthemum marks. It looked like Russian successors did everything to erase any signs of Japanese influence and carefully restored the surface of the building so that it would look like the building was Russian from the beginning. I did not feel like getting inside just to see entirely Russian displays.

Another remain is Former Karafuto Shrine where an annual summer festival was held by Japanese residents. Stone steps leading to the shrine remained on the east edge of downtown. They were well preserved with lines of trees neatly planted on both sides. Stepping up the stairs to the shine, however, I found a bunch of stone statues standing at the top. They were all figures of Russian soldiers whose names I did not know. Again the site was completely turned Russian. I heard the wooden sanctuary was deep in the forest I would have to plow through. Even local people probably would not know where it was and there was no way I could reach it on my own. Somebody told me it was left to decay in the middle of the forest for the last 72 years.

Pleasant Memories

It was really mindboggling to see how much Sakhalin had changed over the last 72 years. Former Japanese residents would probably be shocked to see all the traces of Japanese signs gone. The old post office where the nine women sacrificed their lives to fulfill their duty was now an apartment building for Russian residents who probably had no idea what had happened. An old shopping arcade busy with Japanese mothers every afternoon was turned into a Russian market. The school they attended was replaced with a parking lot.

Still, I did have pleasant days in Sakhalin over the week. The memories that keep coming back to me are the smiling face of the train conductor who let me get away with drinking beer in the compartment, the nice pleasant jog I had every morning in Gagarin Park, the little boy who came to inspect my ticket on the Children Railway, the cheerful cabdriver I had a ride with to the hot spring and the cozy dip into the water, and the women at the little grocery store who waved a

The worst tragedy of all was what happened in Maoka (now called Kholmsk) on August 20. The Soviet Army set fire on the whole town while defenseless Japanese civilians packed what they could grab to flee. There was a post office responsible for all telecommunication. Despite the imminent threat, nine young women working there refused to flee. They were just determined to fulfill their responsibility of connecting emergency telephone lines. While the fire was raging outside the building, they stayed put in front of the switchboard until the last moment. As the windows shattered with gunfire and the ceiling collapsed, they all swallowed poison and left their final words before death "This is it. Sayonara. Sayonara"

Coincidentally, I was in Sakhalin on the same date 72 years later and decided to head for this historical town on that special day. It was a small town on the other side of the island. The bus went over the mountain ridge and ran downhill on a crooked road through forests. After many turns, a small town appeared at the foot of the mountains.

As I stepped out, there was a pretty flowerbed in the square near the bus terminal. Beyond the square was Mamiya Channel and Mainland Russia. I had a pleasant walk along the shore with a nice breeze cooling my face.

Studying the map, I spotted the very site where Old Maoka Post Office used to stand. The office had been torn down, and there was an apartment complex instead. The first floor was used as a new post office, which was closed because it was Sunday. There was no trace of the tragedy. Of course, there was no ceremony to commemorate the nine young martyrs. The residents of the apartments or the post office workers probably didn't know anything about what had happened 72 years before.

While I felt sorry for the nine martyrs, I had no right to disturb their quiet life in the quiet town. Besides, I did not know any Russian except *Izviniche*. I was just a powerless observer. All I could do was to take a couple of snapshots and post them on my Facebook. I caught the next bus to go back.

After 72 Years

The trip to Maoka made it clear how much things have changed since Japan left the island 72 years before. Indeed there remained few traces of Japan's ruling. It seemed that the Russians have done everything to make sure the whole island turned into theirs.

There were only two buildings that are remaining from the days when Japan occupied the area. One was the old building of the former Karafuto Museum, which was now used as the Museum of Local Lore. It was a majestic stone building ornamented with a brick roof and reminded me of some western style buildings constructed in Meiji Era which we often see in places like Yokohama or Kobe. There were two marks of chrysanthemum flowers on both sides of the main entrance, which was all that was left from Japanese ownership.

Inside the building were some displays of Mamiya Rinzo or Mogami Tokunai, two Japanese

In fact, I was one of such tourists. The problem was that I had no guide and was on my own. It took me more than one-hour roaming around the bus terminal before I could find the right bus. The truth was I was having trouble saying the mouthful Russian name for *Sakaehama*, *Starodubskoe* and could hardly make myself understood.

Starodubskoe was a small village. Unable to tell the minibus driver that I wanted to go to Lake Swan, I was dropped off in the middle of nowhere. There was no one nearby. There was just a little grocery store by the road. This was the moment to test myself. How well could I manage the situation where there was no one I could rely on? How close could I get to Kindaichi?

The first challenge was to find someone to speak to. So I mustered up my courage and stepped into the grocery store. Not knowing what to say, I just bought some ice cream, thinking the grocer would be kind to a paying customer. Then I opened a book, looked up how to say lake and said it in broken Russian. The woman behind the counter looked puzzled, so I repeated the same word. She looked even more puzzled and pulled out from her bag a smartphone and said what sounded like "Yapan?" Assuming she asked if I was Japanese, I nodded. Then she brought the smartphone to my face and said something. On the screen, there were a Japanese flag and a Russian flag. So I figured she wanted me to say in Japanese what I wanted to say so that the smartphone could translate it into Russian.

Google was superb. It instantly translated what I said. The woman looked surprised to know what distance I wanted to go. She showed me a map and told me where we were and where I was going. Then she called a cab for me. She kindly wrote down how to say in Russian "I am going to the Lake Swan" and told me to hand it to the cab driver.

After about twenty minutes I stood by the lakeside and had a picture taken by the cab driver. The lake was nothing spectacular. It was just mush in a meadow and did not give me any literary inspiration I was expecting. Still, I was satisfied that I managed communication, if not as smart as Kindaichi. I just wish I had succeeded in communicating without the help of Google.

War Legacy

The Japanese living in Sakhalin at the time of the Second World War went through tragic history when Japan surrendered and stopped fighting on August 15, 1945. The Soviet Union seized this opportunity and invaded South Sakhalin. They argued that Japan did not officially sign the document of surrender until September 2nd, therefore it was still wartime. But the truth was the Soviet and Japan had signed the Soviet–Japanese Neutrality Pact in 1941, where both counties pledged to refrain from act of aggression and respect the territorial integrity of each other. But Joseph Stalin, the mad dictator, unilaterally broke the agreement. During my stay in Sakhalin, I was disturbed to see a monument in town that commemorated the Second World War. There was a statue of a "victorious" Russian soldier holding a flag. Local people probably were oblivious to the fact that the Soviets broke the agreement one-sidedly and took the Japanese land by force.

every time he asked for a word. This was when his ingenuity came into play. On a sheet of paper, he drew a messy and incomprehensible bunch of lines and showed it to the little kids. They all looked puzzled and said in chorus, "hemata?" It turned out that this "hemata" was how they said "what" in Ainu. From then on, Kindaichi just pointed at an object he wanted to know how to say and said "hemata?" and then the kids taught him a new word. By so doing he learned 70 words before it got dark and excitedly returned to the village and showed his new vocabulary to the unfriendly villagers. It was then that they finally smiled. They all started teaching many more words. This was how he was accepted into the community and opened the door to the new world.

Another figure worth mentioning is Miyazawa Kenji, a poet, writer or philosopher from Taisho Era. His literary works often appear in elementary school textbooks and have been read by generations of people. They are all full of compassion and gentleness, but the most famous work of all is Milky Railway, a story where a bullied boy, Jovanni finds himself on a mysterious train flying in space. Talking with fellow passengers, he seriously gives thought to the purpose of life and comes to conclude that he will live for happiness of others. It is the very life principle of Miyazawa's expressed in a line in his famous poem in Unbeaten by Rain, Unbeaten by Wind.

Consider yourself last, always put others first.

(Translated by Catherine Iwata et.al)

In fact, Miyazawa was unknown in his days. He only became famous after his death, and his life remains very enigmatic. But it is believed that he got inspiration for this masterpiece on his trip to Sakhalin back in 1923. He went over to the island to mourn the death of his younger sister, who had passed away a year before. Leaving Hanamaki, Iwate, he reached Wakkanai after spending five days on the train. Then he crossed the sea and took the train from Otomari heading north. The train ride on the wild Sakhalin at night was probably just like flying across the universe on the train. All visible from the window must have been the starry sky with the sound of train track under the car.

Miyazawa got off at Sakaehama, the very end of the railway at that time and probably strolled around on the beach, gazing at the Northern Pacific and savoring the image of his beloved sister. He might have gone further and sat by Lake Swan, watching the timeless nature, deep in thought. Many experts say that this was how Miyazawa came up with the fantasia where souls of the dead appear out of nowhere and come aboard the train to reach heaven. I got a similar eerie but peaceful feeling when I was on the train to Nogliki.

Now many tourists from Japan like to travel on the same route as Miyazawa so that they can expect to have a similar experience, gazing at a starry sky from the train window. What disappoints them is that the railway has been cut off at Dolinsk, about 10km off Sakaehama. Yet eager tourists try to trace the old train track and stand on the spot where the old Sakaehama Station was located. They stroll on the same beach and look at the same lake to put themselves in the same mindset as Miyazawa's.

"s" and x "h." Next, as I was checking the train schedule on the internet, I came across a site that listed all station names both in Russian and katakana. This site turned out to be of great help in learning how to read. Below is part of the site.

Korsakov-Корса́ков,
Dolinsk-Долинск
Pogibi-Погиби
Mgahi-Мгачи
Chekhov-Чехов

As I was on the train, I practiced reading the station signs every time the train pulled over. As I walked to town, I tried to decode the street sign every time I came to an intersection.

The great thing about going through this practice was that I could sympathize with my poor students struggling to read English. Some letters such as ж and x looked similar, which was confusing, and took a few seconds to decode a single word. But this is exactly how students would feel. They often substitute "b" for "d" and "d" for "b," but this does not mean they are bumd—no sorry dumb. Now I can respect them for going through the same learning process I experienced in Russian. I distinctly remember how glad I was at the bus terminal when I was able to find the right bus going to Kholmsk by reading the sign *Холмск* on the front window. I almost jumped for joy when I successfully decoded a building sign *гимнаст* as gymnast. I was happy to see a hotel receptionist or a banker smile when I read aloud their names written on their name tags. I guess this is a sort of pleasure I am supposed to lead students to feel.

Japanese Historical Figures

Since Sakhalin is former Japanese territory, there are some Japanese historical figures related to the place, among whom are Kindaichi Kyosuke and Miyazawa Kenji. In fact, I tried to emulate these two figures in my trip.

Kindaichi was a linguist in the early 20th century who is famous for his research in the Ainu Language, which was spoken by indigenous people living in Hokkaido or further north. He left a notable anecdote when he was in Sakhalin.

In 1907, when he was in his 20's he took a trip to Southern Sakhalin then Japanese territory, and visited a small village called Ochopokka to do some linguistic fieldwork. However, it was such a closed society that the villagers were unfriendly and tried to avoid the outsider. The only people who showed interest in the young researcher were little kids, who gathered around him with curious looks. So Kindaichi had no choice but to rely upon these little teachers for linguistic data. Speaking little Karafuto Ainu, he used a sketchbook and a pen for communication. When he drew a picture of an eye, the kids taught them how to say "eye" in their language. He drew a picture of a nose and learned how to say it in Ainu.

But what he really needed was how to say "what" so that he wouldn't have to draw a picture

natural hot water would be the best place to sit still. I showed the picture to the hotel receptionist. Without any verbal communication, she seemed to understand what I wanted and arranged me a cab.

The cab driver was a big and cheerful middle-aged woman who would not stop talking even though she knew I didn't understand a thing she said. The ride was so smooth with no traffic lights. It was one of the best drives in my life on a winding road through the forests and over hills with rivers and swamps. Her incessant chatter in Russian sounded like cozy background music.

At the hot spring site stood a few small wooden huts. Each contained a small bathtub where hot water kept coming in from somewhere. The driver found an open hut, ushered me in, and said something in Russian. When I shrugged my shoulders to indicate I didn't understand, she laughed and tapped me on the back and walked off toward the car. I guessed what she said was nothing of importance and believed she would be waiting for me in the car.

I decided to sit in the hot bathtub and enjoy it to my heart's content. After all, it was not wise to go back to town soon after paying about 3,000 yen for the taxi ride. I felt the water becoming a little too hot to stay in forever, so I came out from time to time to cool down and went back into the water again and again. It was so quiet that I felt like I was only one in the world listening to the sound of water flowing in.

I stayed in the hut until I felt dehydrated. As I opened the door to come out, there were a bunch of angry local people hissing something in Russian. Judging by the way they were pointing at their wristwatches, I figured I had been staying in the hut much longer than I was allowed and kept them waiting in frustration. It was the second time I had to say *Izviniche*.

Learning to Read Russian

Surprisingly Sakhalin was devoid of English information, which made the place very different from many places I had visited. The Japanese may be notorious for being poor English speakers, but streets or train stations in Japan are usually kind enough to post English signs. While I would have a hard time communicating with local people in China or Thailand, bilingual signs are everywhere, so at least I could tell where I am on the map. The French may be known for their aversion to English but at least they use the same alphabet, so I usually don't have any trouble reading street signs. Yet, signs in Sakhalin are almost invariably monolingual. There are as few English speakers in Sakhalin as there are in Tokyo.

For this reason, I had to learn to read the Russian alphabet so that I could find the right bus, the right street, and the right building. Not having done any homework before this trip I started my study after I arrived. First I looked at my train ticket. The place I was going to was Nogliki, and it was spelled *Ноглики* on the ticket. So I figured the Russian letter Н makes the "N" sound, г makes "G" sound, and И does "I." Then I saw another word typed on the ticket that read *Южно-Сахалинск* and guessed it stood for "Yuzhno-Sakhalinsk," where the train leaves. So I could figure out the letter Ю makes what sounds like "Y" in English and ж sounds like "z," с does like

the colonial times of the early 20th century. The major line runs from Korsakov in the south and Nogliki in the north. The whole distance makes over 600km. There even used to be a light train service running all the way to Okha the northernmost town of the island.

Being a railway lover, I took advantage of this opportunity to travel by train all the way to Nogliki. As I had been warned by the agent that there would be no food available on the car, I spent some time browsing through the market near the station for food to bring into the train. It was such fun shopping in the market as the sun was about to set. Assuming Sakhalin's seafood should be as good as that in Hokkaido, I bought a can of crab meat and ikura, or salmon roe. It was then that I learned the Japanese word ikura came from Russian. The next thing I needed to get was Sakhalin beer, the brand I had at Cape Soya five years before, but there was no such thing at the supermarket. Many of beer cans looked like German brands, but I wanted something Russian. I managed to communicate with a store clerk, and he recommended a brand of beer called Baltika. I waited to buy it until the last minute before the departure so that I could open a cold beer as the train pulled out.

There were four people in the same compartment, none of whom spoke English. To establish a relationship, I offered a bite of crab meat to my fellow passengers, but they all declined with a polite smile. Soon buildings outside the window were replaced by a thick forest of pine trees under the pale pink sky as the train moved on. Then they soon disappeared as the sun set and all we could see was darkness. The compartment fell silent.

I didn't know why my fellow passengers were giggling to watch me drink beer until the train conductor opened the door and said something in Russian, pointing at my beer can, which I guessed meant that I was not supposed to drink in the compartment. I looked up in my dictionary how to say I'm sorry and said it in katakana Russian *Izviniche*. Then the conductor smiled and closed the door without making any further issue.

The ride was not very comfortable, but I had clean linen to sleep on. The beer made me tipsy and soon I dozed off in the quiet compartment.

After 14 hours the train arrived at Nogliki at 8:30am the next day. The station was located in a quiet part of town and there were just a few small shops. There were many people crowded around to get on different sizes of buses. Before I figured out what to do, all buses departed, and I was left behind with a handful of people. When I showed them my itinerary, one of them kindly called me a cab.

There was nothing to see in the town of Nogliki. There was not much business even in downtown. Most tourists decided to spend half a day and catch the same train back to Yuzhno-Sakhalinsk in the evening. I had nothing particular to do. Besides, there was nobody to talk to because there was hardly anyone speaking English in town.

I usually don't mind doing nothing. I believe the most leisurely way to spend time on a trip is to sit still in a park or on the beach for hours. That's why I decided to stay overnight in the town with no touristic attractions.

As I studied my guidebook, I found there was a hot spring outside the town and thought the

Yuzhno-Sakhalinsk

The state capital Yuzhno-Sakhalinsk, also known as Toyohara in Japanese, has a population of 200,000. Despite the short distance from Wakkanai, the town looks entirely European with majestic stone buildings and wide streets. People walking down the streets are mostly Caucasian, who probably have ancestry in mainland Russia. A small percentage, I'd say around 20% of the people, seem to be of Asian descent. Such people may have some linkage to Japanese, Chinese, Korean, or even Ainu, but who knows. Anyway, there is little influence of the Japanese colonial age visible in town—of course, people drive cars on the right side.

The moment I stepped in this town, I liked it. It was one of the prettiest places I had ever visited. It was far different from the bleak images of a poverty-stricken communist town I had from the 90's. Beautiful flowers were planted along streets and cleaning people were working everywhere in town. Designated as a special economic zone, the city thrived on governmental investment. One day, I saw many streets downtown blocked by the police and heard they had the prime minister's visit to the island.

What made the city more attractive was the number of parks. My favorite of all is Gagarin Park, named after the first Russian cosmonaut who went out to space. It was located right in the middle of the city. It was the perfect place to enjoy the cool summer days, and I went jogging every morning. There was a large lake in the middle, where local families were rowing swan boats under the clear sky. Going around the lake was a pretty little train that ran about a two-kilometer loop. This train was called the "Children's Train," and in fact was operated by school children who reported to work after school. There was a girl who was selling tickets at the counter, and there was a boy who inspected tickets on the train. Although the one in the driver seat was an adult, it seemed like an educational program where little kids could gain some work experience.

Another attraction was a little mountain rising about 400m above the eastern edge of the city. I rode on a gondola lift to the top, where I had a spectacular view of the whole town with streets lined up geometrically and beautiful steeples rising here and there surrounded by mountains in every direction. I heard this was Japanese skiers' favorite destination aiming for powder snow of good quality.

There is a small international airport and direct flights are available from Tokyo or Sapporo. Japanese tourists like me are not uncommon. Quite a few visit the island on business as well. I met a man who said he owned a company engaged in fish trading with Russia. Another man said he was a frequent visitor to Sakhalin although he did not disclose the nature of his business. The number of visitors seems to be rising year after year.

Train Ride to Nogliki

The island is largely covered with a vast railway that is fairly well developed considering its small population. This railway system is largely owed to the Japanese contribution during

degrees Celsius at the lowest. The forests, mostly consisting of perennial trees such as pines, host various wild animals with wolves and bears at the top of the food chain.

The island is located 40 km off Cape Soya and it takes a five-and-a-half-hour ferry ride from Wakkanai to Korsakov, a southern port town. The ferry runs twice a week and people are actively exchanging between the two places, evidenced by a large number of trilingual street signs in Wakkanai written in Japanese, English and Russian. It is even closer to the continent. The narrowest part of the channel is just 7km and it is possible to walk across the frozen sea from the continent to the island in winter. Due to this unique location, it was believed for a long time that Sakhalin was a peninsula stretching out of the eastern part of the continent.

Historically, Sakhalin was not fully explored until the 19th century. In fact, it was the last place on earth whose map was drawn. Originally it was inhabited by indigenous peoples like Ainu, Nivkhi and Orok. They spoke different languages and they probably did not know the shape of the island. The Edo Government in Japan was interested in Karafuto and sent explorers like Mogami Tokunai but the northern part of Karafuto remained inaccessible with the severe climate and ethnic conflicts with aggressive Chinese traders dominating the region. It stayed so mysterious that Japanese officials back then were not even sure what they called Karafuto was the same as what Russians called Sakhalin.

Quite a few Western sailors tried to explore the land. However, as they moved up the sea in the west, they got stuck in a shallow seabed. Seeing the channel narrowing ahead, they prematurely concluded that Sakhalin was land attached to the continent in the west. It was not until 1809 that Mamiya Rinzo traveled north on land and reached the northern tip to confirm that Karafuto was an island and that it was the same as Sakhalin. In honor of his achievement, the channel separating the island from the continent is now called Mamiya Strait.

As the power of China declined after the Opium War in the mid-19th century, Russia tried to get Sakhalin under control by sending some colonists and prisoners and had them cultivate the land. The island was somewhat volatile with Japanese and Russian colonists living side by side without any clear border line between them. The territorial issues were settled when the two countries signed the Treaty of Saint Petersburg, in which they decided that Sakhalin belong to Russia while Japan claimed what is known as the Northern Territory today. It was then that Anton Chekhov, the Russian writer visited the island and documented his observation on poverty and hardship in the penal colony in the Far East.

In the early 20th century, Japan obtained the southern part of Sakhalin as a result of their victory in the Rosso Japan War. A number of Japanese citizens moved to the new colony and built up industries in South Karafuto. This was when the pictures in Karafuto I saw in Wakkanai were taken. The Japanese Colonial Age continued until 1945 when they were forced to abandon the land after they surrendered in the Second World War.

explain restrictions imposed on us Japanese tourists visiting Russia. We are not allowed to travel freely, but we have to have our itineraries approved by the embassy. So we have to specify when and how we enter the county and state which hotel to spend each night. We have to travel under the supervision of the "Big Brother" after all.

Swamped with work before the departure, I resorted to the easiest way to get all the paperwork done. I just applied for an established package plan organized by a travel agent in Tokyo. This idea would make the whole journey completely different from trips I usually take. I wouldn't have to make decisions as to where to go and find a hotel day by day. I could expect a driver waiting for me at the ferry terminal, holding a sign "Mr. Harada." This plan let off the initial psychological burden I usually experience when I arrive in a new country. I didn't have to find out how to get downtown from the airport while avoiding fishy cab drivers pestering me. Everything would be taken care of by the agent, and this was the reason I did not bother to study any Russian before this trip. However, this later turned out to be my biggest mistake.

First Day

My preconception about Russians completely changed on the first day. They were not bureaucratic communists anymore. In fact, they went all out to make customers happy. The first surprise happened on the ferry when I stood up to go to the bathroom. The Russian captain beckoned on me with a big smile on his face and showed me a door. Thanking him, I opened the door which I believed would lead to the bathroom. Surprisingly, however, what came into my view were big full windows facing the open sea and a steering wheel. The captain beamed again and offered me the seat in the middle. He even had a young crew member take my picture. How much hospitality were these people ready to offer? Before the trip, I had heard many horror stories about crew members of Russian Aeroflot bumping passengers with their big asses as they push the cart and serving food with robot-like faces. On the contrary, these crew members just as entertaining as those in Disneyland.

As the boat came closer to the destination, a view of a town gradually became visible with pretty housing lined on the hill. It was a town of Korsakov, which used to be called Otomari during the Japanese colonial times. Now it brought home that Sakhalin was inhabited by ordinary people, not by aliens that came out of the wrecked UFO.

Some Facts about Sakhalin

Now, let me briefly summarize my quick homework about the land I was about to set foot in. Sakhalin was a long thin island off the east coast of Russia. It was so thin that it is hard to be aware that it is almost as large as Hokkaido but its population is just one-tenth with about 500,000 people. The island is over 945km south to north and 163km from east to west. Geographically, the land mostly belongs to subarctic region and temperature can drop below -40

fighter, resulting in the deaths of hundreds of civilian passengers including Japanese nationals. While it was not clear why the aircraft diverted from its usual route and strayed into Russian airspace, I certainly remember grownups, TV commenters and my junior high school teachers severely criticizing the communist regime. We were also exasperated about the Soviets unlawfully occupying northern Japanese territories off the coast of Nemuro consisting of Kunashiri, Etorofu, Habomai, and Shikotan. We had every reason to believe that the Soviet Union was a threat and called them a virtual enemy.

We also knew that the Soviet Union was such an undemocratic country that it was sending anyone to exile who opposed the government such as Andrei Sakharov. Then I, as a teenager, got extremely disturbed with not only the Soviet Government but also by the general public. There was a special TV program produced by American media as I recall, where dozens of American citizens and Soviet citizens at two distant venues debated via satellite. What they said was voice-covered in Japanese and broadcast by NHK. In this debate, everything the Soviet people said was indeed mindboggling. Every citizen expressed unshaken faith in their government. One of them even called Sakharov a traitor. When accused of shooting the commercial flight, they said it was justifiable self-defense against espionage conducted by America and South Korea, showing no remorse over the death of the innocent people. It seemed to me like a case of brainwashed people. I was scared to see people having blind faith in "Big Brother."

Things changed drastically after Mikhail Gorbachev, the chairperson of the communist party, conducted a series of political reforms in the late 1980's. The Soviet people learned to express their dissatisfaction over their poverty, seeking a new political structure. Their anger mounted until they chose Boris Yeltsin as their new leader and finally dissolved the Soviet Union in 1991. One TV commentator aptly stated that Gorbachev was washed away in an avalanche caused by his own doing. During this process of democratization, Japanese opinion polls showed a significant shift in people's sentiment. The majority of the Japanese stated that they had friendly feelings toward the Soviet and Russia.

It was then when I first visited Russia for the first time in 1992. It was just for an overnight transit in Moscow, but I got an opportunity to go on a town excursion on a guided bus tour and saw the first MacDonald's restaurant in Russia that recently had opened, epitomizing the end of the Cold War.

Now the communist regime is no longer a threat, and Japanese Prime Minister Shinzo Abe and Russian President Vladimir Putin have established an amicable relationship. Former residents of the Northern Territory are now allowed to visit their old homes without visas. While there remains a certain degree of political distrust, Japanese citizens have much less reason to hate Russia. It is now outdated to regard it as a virtual enemy.

Still, I knew very little about Sakhalin. In my mind, it was still nothing more than the long thin island on the map and land with "the wrecked U.F.O" I saw five years before. Departing for the unknown world, I felt like Alice in Wonderland peeking into the rabbit hole.

Now before I start recounting my journey for the next seven days on the island, I have to

Sakhalin Karafuto: Close but Distant, Distant but Close

Jun Harada

Was it just a mirage?

It was an unusually clear day when I stood at Cape Soya, the northernmost tip of Hokkaido. Right in front of me lay Soya Strait. And then vaguely stretching on the horizon was a flat and green island, which looked like a mirage but was indeed a real image. There was not supposed to be any land of that size but Sakhalin, or Karafuto as we call it in Japanese. All I knew about this island was the long and thin shape I saw on the map. I did not know anything about any towns or mountains there.

Using coin-operated binoculars, I was able to see a man-made structure on the shore—a sign of civilization. It was five or six white hemisphere shapes facing Hokkaido, which gave me a creepy feeling that I was looking at a wrecked U.F.O. that landed on an uninhabited island. I was thrilled. "Aliens have begun their invasion on our planet!" This excitement reminded me of an old TV series I saw when I was a kid, where the Earth Defense Army bravely fought aliens from space. Later I learned that it was a radar system but what was its purpose? Was it watching out against us Japanese?

My curiosity was piqued even further where I saw displays of Sakhalin at the Minato Gallery in downtown Wakkanai. It showcased old pictures of Sakhalin from the early 20th century. It was part of Japanese territory between 1905 after the Russo-Japanese War, and 1945, when Japan surrendered in the Second World War. On those black and white pictures, were the glorious days of the island, where people were flocking towards a busy shopping street or a train station with Japanese signs. In those days, industries such as papermaking or coalmining thrived under Japanese leadership. What became of those scenes? What is there to see on the flat green land of aliens? I felt the desire growing to travel across the strait and set foot on the island someday.

Virtual Enemy

Once again I was back in Wakkanai with a Russian visa and a ferry ticket to sail across the sea. Standing at the ferry terminal, I had some strange feelings about visiting this part of Russia. In fact, I was taught to hate Russians when I grew up. Back in the 1980's, when I was in my teens, Russia, then called the Soviet Union, was a so-called "virtual enemy."

In 1980, Japan along with many of American allies decided to boycott the Moscow Olympics, protesting against Soviet's invasion of Afghanistan. Then four years later, the Soviet and its allies retaliated, boycotting the Los Angeles Olympics. What made us hate the Sovies even more was the Korean Airline Shooting Incident in 1983, when a Korean airplane was shot down by a Soviet air

－執　筆　者　紹　介－

原　田　　淳……英語科教諭
青木輝憲……英語科講師
柳　本　　博……国語科教諭

紀　要　委　員

兼田信一郎　　原田　　淳
高畑義憲

研究紀要　第32号

平成30年3月25日　発行
発行者　東京都文京区関口3丁目8番1号
　　獨協中学・高等学校　紀要委員会
印刷所　東京都北区王子本町2丁目5番4号
　　株式会社　　王文社

Dokkyo Junior & Senior High School Review

No. 32 2017

Contents

Articles :

Sakhalin Karafuto: Close but Distant, Distant but Close

…… Jun HARADA … (1)

What Giorgio Armani Has Designed — An Approach in Analysis on the History of Fashion …… Terutoshi AOKI … (15)

Tunisian Immigrants in the Slum « la digue des Français » in Nice — Problems and Functions of Slums — …… Terutoshi AOKI … (33)

Educational Practice Report :

We will tackle Hamlet …… Hiroshi YANAGIMOTO … 1

Edited by

Dokkyo Junior & Senior High School Review Committee

Address : Dokkyo Junior & Senior High School

3-8-1, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0014